

Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna 章の研究

一校訂テキストと和訳・訳註一 (1)

小野 基

はじめに*

仏教論理学を大成したダルマキールティ (Dharmakīrti; ca.600-660) の未完の大著『ブラマーナ・ヴァールツェティカ』(Pramāṇavārttika; 以下 PV と略称) に対する最も大部な註釈書として知られるブラジュニャーカラグプタ (Prajñākaragupta; ca.750-810) の『ブラマーナ・ヴァールツェティカ・アランカーラ』(Pramāṇavārttikālaṃkāra; 以下 PVA と略称) は、周知のように 1920 年代末にサンクリティヤーヤナ博士によってチベットでサンスクリット原典写本が発見され、同博士の手により 1953 年に校訂本が出版された。8 世紀末頃に北部インドで書かれたとみられる同書は、インドにおいて、その後の仏教哲学、バラモン教・ヒンドゥー教哲学、ジャイナ教哲学に多大な影響を与え、さらに 11 世紀末頃にはチベット語に翻訳され、爾来チベットにおいても仏教論理学部門の最も重要な論書の一つとみなされた。

しかしながら、インドにおいては、仏教の衰退と共に、他の仏教哲学論書と同様に同書に対する学者達の関心は急速に薄らいでいった。他方、チベットにおいても、翻訳当初はよく研究された痕跡もあるが、14 世紀以来ダルモッタラ (Dharmottara; ca.740-800) の解釈をダルマキールティ解釈の正統と位置づけるゲルク派がチベット仏教界において覇権を確立するにつれ、徐々に同書とその註釈書に対する関心は減少していったようである。著書の随所で独創的な学説を展開するブラジュニャーカラグプタも、その著書の註釈書という性格の故もあってか、今日まで正当に評価されることなく思想史の流れに埋没してしまっていた観がある。

しかし近年の研究は、ブラジュニャーカラグプタが 8 世紀を中心とする中期の仏教論理学派の中で最も傑出した思想家の一人であり、また最後期の仏教哲学を代表する 11 世紀の大家ジ

*1982 年に第 1 回国際ダルマキールティ学会が京都大学で開催されてから 20 年を関する。この間にインド仏教認識論・論理学の研究は着実に成果を上げてきた。ディグナーガとダルマキールティの研究はもとより、彼らの註釈者・後継者の研究が世界中で進められ、6 世紀から 12 世紀に至るインド仏教認識論・論理学の思想史が細部に亘って解明されつつある。筆者も 1982 年に斯学の研究を志し、ダルマキールティの『ブラマーナ・ヴァールツェティカ』Parārthānumāna 章の研究を手始めに『ブラマーナ・ヴィニシュチャヤ』Parārthānumāna 章の研究に進むと共に、近年は主に『ブラマーナ・ヴァールツェティカ』に対するブラジュニャーカラグプタの註釈『ブラマーナ・ヴァールツェティカ・アランカーラ』(PVA) の研究に従事してきた。今回研究に着手する PVA の Parārthānumāna 章は以上の筆者の個人研究史の 2 つの主要テーマの十字路口に位置し、筆者は予てよりその基礎研究に取り組みたいと考えていた。また PVA の Parārthānumāna 章は 1982 年に故江島恵教先生が東京大学に赴任され筆者もその講筵の末席に連なった際、先生が演習で最初に取り上げたテキストであったという因縁もある。

さて、ブラジュニャーカラグプタは昨今比較的多くの研究者が関心を向けるようになり、研究の方法論も確立されつつあるが、テキスト自体の難解さは少しも変わることはない。本研究において筆者が目指すのは、まず何よりも初めに精確な校訂テキストの作成と、伝統的註釈に依拠した思想史的文脈に合致した解釈である。Parārthānumāna 章冒頭から開始し、当面『ブラマーナ・ヴァールツェティカ』第 4 章第 90 偈に対する註釈部分までのテキスト校訂とヤマール註を含む全訳を目標とする。目標到達まで何年を要するかわからないが、近い将来、PVA の写本がより鮮明な形で参照できるようになる可能性や、ラサに現存すると伝えられるヤマール註のサンスクリット原典写本が研究者の手に委ねられる可能性も皆無ではなからう。そのような日が遠からず来ることを期待しつつ、ここに本研究を開始する。

ユニャーナシュリーミトラ (Jñānaśrīmitra; ca. 980-1030 に活躍) に最も大きな影響を与えた存在として、6 世紀から 12 世紀に及ぶ後期インド仏教哲学史の流れの中で、要としての位置にあることを明らかにしつつある。後期インド仏教哲学史の今後の系統的解明に当たって、プラジュニャーカラグプタを正しく読み解くことが最重要課題の一つである所以である。サンクリティヤーヤナ博士の残した校訂本を、この半世紀の間のインド仏教哲学研究の蓄積に基づいて再校訂し、PVA の豊饒な思想を正しく理解する作業が推し進められねばならない。

さて、PVA は極めて難解なテキストではあるが、その研究のための資料的状況は、他のインド仏教哲学の諸論書と比較して恵まれているといえる。まず第一に、目下研究者に参照可能な写本は、完本は一本のみ、また「直接知覚」章の一部について第二の写本があるに過ぎないにもかかわらず、完本が極めて優良な写本であるという点が挙げられる。優良という意味は、PVA のチベット訳や、PVA に対する註釈のチベット訳から回収される *pratīka*、さらに後代の文献に現れる PVA からの引用等から判断して、写本の伝承状態が十分に良好であると推定できるといふことに他ならない。第二に、現存のチベット訳が大翻訳家ローデン・シェーラップ (Blo ldan shes rab; 1059-1109) を中心に成った名訳であり、またチベット訳に際して用いられたと思われる原典写本が、上述の完本の写本と系統上極めて近い関係にあると考えられるという点がある。第三に、チベット訳としてではあるが 2 つの浩瀚な註釈書が利用可能という状況がある。とりわけヤマーリ (Yamāri; ca. 1000-1060) の註は、内容的に優れていると同時に、チベット訳者の一人が PVA と同じローデン・シェーラップであり、かつヤマーリが註釈執筆の際に用いたと考えられる原典が、やはり上述の完本の写本と系統上近いと考えられるという点で、PVA の校訂および解釈に非常に有益である。またヤマーリ註に先立つジャヤンタ (Jayanta; 10 世紀頃) の註も、チベット訳の晦渋さは否めないが、別系統の PVA 写本の伝承そして解釈の伝統を示すものとして、PVA 研究に重要な一視点を与えるものとなっている。第四に、後代のインド思想界、とりわけ 8 世紀末以降のジャイナ教の論理学者たち、そしてカシュミール・ニャーヤ学派のバーサルヴァジュニャ (Bhāsarvajña; 10 世紀頃) らが PVA を盛んに引用し、時に批判を加えているという事実を指摘せねばならない。これらの資料は、中世インドにおける PVA テキストの多様な伝承を示すばかりでなく、PVA の内容理解に際しても、多角的な視点を提供し得るものである¹。これらの資料を全面的に駆使しながら、ダルマキールティ註釈者たちの間の見解の相違にも目を配りながら研究を進めることにより、後期インド仏教哲学史全体の研究に、確固たる橋頭堡を築くことが可能となるであろう。

本稿は、この PVA の「他者のための推理」(*parārthānumāna*) 章を冒頭から文献学的に研究する。「他者のための推理」という章題について一言するならば、推理を「自己のため」(*svārtha*) 「他者のため」(*parārtha*) の二つに分類し、それを著書の章題としたのは、ディグナーガ (Dignāga; ca. 480-540) の『プラマーナ・サムッチャヤ』(*Pramāṇasamuccaya*; 以下 PS と略称) をもって嚆矢とする。以後、仏教論理学派では、推理におけるこの二つの範疇が維持さ

¹ 「他者のための推理」章の研究には直接関係しないが、「認識根拠の証明」章と「直接知覚」章に対するラヴィグプタ (Ravigupta; ca. 780-840) の註釈が、プラジュニャーカラグプタの記述の多くを逐語的に援用していることも、ここで指摘しておかなければならない。すなわち、PVA のはじめの 2 章の研究に当たっては、ラヴィグプタ註もまた、極めて有力な研究資料となる。

れるが、この範疇の概念史自体が、まだ十分に解明されているとは言い難い。これを明らかにすることは本研究の目的の一つでもあるが、ここで予め指摘しておかねばならないのは、本研究が扱う PVA の「他者のための推理」章が註釈するダルマキールティの PV の「他者のための推理」章が未完成に終わっているという事実である。すなわち同章は、ディグナーガが「他者のための推理」の章題のもとに論じた諸問題のうちの一部を論じるに留まっている。また、完結した「他者のための推理」章をもつダルマキールティの『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』(Pramāṇaviniścaya) と『ニヤーヤ・ビンドウ』(Nyāyabindu) も、その内容構成はディグナーガの「他者のための推理」章とは相当趣が異なっている点も注意せねばならない。詳細は別稿を期すが、そのような状況にも係わらず、結局「自己のための推理」「他者のための推理」の範疇は、インドでは仏教哲学が衰滅した 13 世紀まで保持され、チベットでも温存されたのであった。

以下に、参考までに、本研究が対象とする PVA の「他者のための推理」章が註釈する PV の「他者のための推理」章の便宜的な梗概を挙げておくことにする。

- | | | |
|----------|---|---------------|
| 1. | 「他者のための推理」(<i>parārthānumāna</i>) の定義 [ad PS III 1ab] | |
| 1.1. | 「自身によって認識された」(<i>svadṛṣṭa</i>) という語句の役割 | PV IV 1-12 |
| 1.2. | 「事象」(<i>artha</i>) という語句の役割 | PV IV 13-14 |
| 2. | 主張命題 (<i>pakṣa</i>) | |
| 2.1. | 主張命題の地位 [ad PS III 1cd] | PV IV 15-27 |
| 2.2. | 主張命題の定義 [ad PS III 2ab] | |
| 2.2.1. | 総論 | PV IV 28-30 |
| 2.2.2. | 限定句「意図された」(<i>iṣṭa</i>) の役割 | PV IV 31-41 |
| 2.2.3. | 限定句「自ら」(<i>svayam</i>) の役割 | PV IV 42-83 |
| 2.2.4. | 4 つの限定句の役割の総括 | PV IV 84-90 |
| 2.2.5. | 疑似主張命題 (<i>pakṣābhāsa</i>) [ad PS III 2cd] | |
| 2.2.5.1. | 総論 | PV IV 91-92 |
| 2.2.5.2. | 聖言 (<i>āgama</i>) による排斥 | PV IV 93-108 |
| 2.2.5.3. | 常識 (<i>pratīti</i>) による排斥 | PV IV 109-130 |
| 2.2.5.4. | 直接知覚 (<i>pratyakṣa</i>) による排斥 | PV IV 131-135 |
| 2.2.5.5. | 「自らの主題」(<i>svadharmīn</i>) という語句の役割 | PV IV 136-148 |
| 2.2.5.6. | その他の疑似主張命題 | PV IV 149-163 |
| 2.3. | Nyāyasūtra の主張命題の定義に対する批判 [ad PS III 3-4] | PV IV 164-172 |
| 2.3.1. | Nyāyasūtra の疑似主張命題の定義に対する批判 [ad PS III 6] | PV IV 173-188 |
| 3. | 論証因 (<i>hetu</i>) | |
| 3.1. | 総論 [ad PS III 8-10] | PV IV 189-194 |
| 3.2. | 九句因 (<i>hetucakra</i>) と自性因・所作因 [ad PS III 21-22] | PV IV 195-204 |
| 3.3. | 不共不定因 (<i>asādhāraṇānaikāntika</i>) について | PV IV 205-259 |
| 3.4. | 無知覚 (<i>anupalabdhi</i>) について | PV IV 260-279 |
| 3.5. | 刹那滅論証 (<i>vināśitvānumāna</i>) について | PV IV 280-285 |

1

PVA 467,4-469,22 サンスクリット校訂テキスト*

[231b2]svārthānumāḥ, nānantaram parārthānumānam¹ ucyate, svārthānumānapūrvakatvāt parārthānumānasya. tatra –

5 parārtham anumānam² tu svadr̥ṣṭārthaparakāśanam |³

svena dr̥ṣṭam svadr̥ṣṭam vā diprativādibhyām pratipādyapratipādakābhyām svadr̥ṣṭasyety arthaḥ. yadi prāśnikās teṣām api, teṣām apy adhikārāt⁴. vipratipattinirāsas tu sāmartyād eva prasi, ddaḥ. prakāśyate 'nena svapratīto 'rthaḥ paraṃ prati, tac ca kāyavāgvijñaptirūpam. tatra svadr̥ṣṭo 'rthas trirūpaṃ līngam.

10 nanu trirūpaṃ līngam iti ca⁵ kutaḥ, svadr̥ṣṭārthagrahaṇasya⁶ sarvārthapratipādanasambhavāt⁷. tato 'numeyasya parokṣarūpasya sakalasya prakāśanam paraṃ praty anumānam parārtham iti prāptam⁸.

atrocyate –

trirūpaṃ līngam utsrjya , nānyasyāsti prakāśanam⁹ |

15 na śakyam pratipattum tad anyenety aprakāśanam ||1||

prakāśito hy asāv ucyate yatra parasya sampratipattiḥ. ata eva prakarṣābhīdhāyī¹⁰ praśabdah¹¹, pramāṇapratipanne¹² ca parasya sampratipattiḥ. yadi cānumeyam¹³ api pramāṇapratipannam,

* 以下のテキスト校訂は、先に筆者の公刊した PVA 劈頭部分の再校訂 (cf. MOTOI ONO: *Prajñākaraguptas Erklärung der Definition gültiger Erkenntnis (Pramānavārttikālakāra zu Pramānavārttika II 1-7). Teil I. Sanskrit-Text und Materialien.* Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. Wien 2000) とほぼ同じ原則に基づいて作成されているが、注意すべき点がある。それは、今回の校訂部分に関しては従来 2 種類の写本の存在が確認されている点である。そのうち、現在研究者が参照可能なのは写本 B (cf. Ms; 校訂テキスト内に下付き [] で location を示す) のみであるが、PVA の校訂者 Sāṅkṛtyāyana が底本として用いているのは、目下参照不可能な今一つの写本 A である (cf. Ms; Preface iii)。従って、以下に使用される記号のうち、Ms は写本 B の筆者による読みを指し、他方 S は Sāṅkṛtyāyana 校訂本における写本 A の読みを、また Sb は校訂本の脚註に示された、Sāṅkṛtyāyana による写本 B の読みをそれぞれ示す。なお、チベット訳 (T, なお location は北京版のそれで代表させる) は、北京版 No.5719: The 145a2-147b6 (P で示す)、デルグ版 No.4221: The 123a4-125b1 (D で示す) に存する。ナルタン版とチョーネ版は本校訂では参照していない。

¹ gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa T(P) 145a2 : gzhan gyi don rjes su dpag pa T(D) 123a4.

² parārtham anumānam *em., metri causa* (cf. PVV 413, note 1) : parārthānumānam Ms, S.

一七九

³ *Cf.* PS III 1ab: gzhan don rjes su dpag pa ni || rang gi mthong don rab gsal byed || PSV[V] 40b1; gzhan gyi don gyi rjes dpag ni || rang gi mthong don gsal byed yin || PSV[K] 124b2f.

⁴ teṣām apy adhikārāt? Ms (cf. de dag kyang dbang du bya ba yin pa'i phyir ro T 145a4) : teṣām adhikārāt S.

⁵ tshul gsum pa zhes bya ba ga las yin la | rtags zhes kyang ga las yin zhes so sor 'brel to || Y 4a1f. : ca *lacks* T 145a6.

⁶ rang gi mthong don smos pa ni Y 4a2 : rang gi mthong ba smos pa ni T 145a5f.

⁷ rang gi mthong ba'i don tsam ston pa yin pa'i phyir T 145a6.

⁸ gzhan gyi don rjes su dpag par bya bar 'gyur ro zhe na T 145a7.

⁹ tshul gsum rtags las ma gtogs pa || gsal byed gzhan ni yod ma yin || T 145a7.

¹⁰ prakarṣābhīdhāyī S (cf. khyad par du 'phags pa'i brjod pa T 145a8) : prakarṣārthābhīdhāyī? Ms.

¹¹ rab kyi tshig smos so T 145a8.

¹² tshad mas rtags pa la yin te T(P) 145a8f. : tshad mas rtags pa ma yin te T(D) 123b2.

¹³ ca *n.c.* T 145b1.

2

tadāvivāda¹⁴ eva. trirūpaliṅgaprakāśadvāreṇa¹⁵ tu vivādāspadībhūtasyaṅnumeya¹⁶ pratipattir itī na vacanasya vyarthatā. tato 'numānam udetīti tad apy anumānam upacārāt.

yady anumānopādanād vacanam anumānam, pratyakṣotpādanāt pratyakṣam api parārtham¹⁷ bhavet.

5 nedarṇ caturasram.

yathā grhītasarṇbandhasmarāṇe¹⁸ vacanāt sati |
anumānodayas tadvan na pratyakṣodayaḥ kvacit ||2||

trirūpaliṅgasmarāṇe niyamenānumodayaḥ |
svapratī,tārthamātrasya¹⁹ vacane²⁰ 'dhyakṣavin na tu ||3||

10 na vacanamātrād adhyakṣam parasyodeti²¹.

nanu paśya mṛgo dhāvātī²² dṛśyate darśanodayaḥ.

na, tatrāpy anumānasyānantaratvāt. tathā hi –

tadarthonmukhatāyāṇ sa²³ paśyety evaṇ niyujyate |
mayā²⁴ pratītam²⁵ evaṇ²⁶ ca²⁷ sāmartyāt pratipāditam ||4||

15 abhimukhībhava mṛgadarśana²⁸ iti niyogavacanam²⁹ etat. abhimukhībhavaś ca yathā mama tathā tavā³⁰ pī³⁰. tata³¹ evam abhimukhībhavane hetūnārṇ³² vyāpāra iti smaran pravartata iti anumānam eva³³. tato 'numānāt³⁴ pratyakṣasambhavam ālocya pravartate.

¹⁴ tadāvivāda S (cf. de'i tshes rtsod pa med pa T 145b1) : tad avivāda Ms, Sb.

¹⁵ trirūpaliṅgaprakāśadvāreṇa Ms : trirūpaliṅgaṇ prakāśanadvāreṇa S (cf. tshul gsum pa'i rtags gsal bar byed pa'i sgo nas T 145b1).

¹⁶ vivādāspadībhūtasyaṅnumeyasya Ms : vivādāspadībhūtānumeya^o S.

¹⁷ gzhan gyi don gyi mngon du (D : mngon sum du P) yang 'gyur ro T 145b3, Y4b4 : vacanam api parārtham pratyakṣam Ms, Sb.

¹⁸ bzung zin pa'i 'brel pa dran par gyur pa na Y 4b4f. : mthong ba yi || 'brel pa dran par gyur pa na T 145b3f.

¹⁹ rang gis rtogs pa'i don tsam ni T(P) 145b4 : rang rig rtogs pa'i don tsam ni T(D) 123b4f.

²⁰ brjod pas T 145b4.

²¹ tshig tsam las ni gzhan la mngon sum skye ba med do T 145b5.

²² zhes bya ba las T 145b5.

²³ de T(D) 123b6 : te T(P) 145b6.

²⁴ nga yis Y 5a6 : nga yi T 145b6.

²⁵ pratītam Ms, Se : pratītim S.

²⁶ evaṇ em. (cf. de ltar T 145b6, Y 5a7) : etac Ms, S.

²⁷ nga yi de ltar rtogs pa yang T 145b6.

²⁸ darśana S : darśane Ms.

²⁹ vacanam lacks T 145b7.

³⁰ khyod kyang de bzhin no zhes so T145b7.

³¹ tata S (cf. de na T 145b7) : tad Ms.

³² rgyu mams kyi Y 5b4 : dbang po mams kyi (D : kyis P) T 145b7.

³³ dbang po mams kyi byed pa 'jug go zhes dran pa'i phyir rjes su dpag pa nyid do T 145b7f.

³⁴ rjes su dpag pas T 145b8, Y 5b6.

3

evaṃ tarhi pratyakṣaviṣaye³⁵ pravartamānaṃ³⁶ sambhavānumānaṃ svabhāvahetuḥ. kārya-
hetur na vacanāt prakāśyate³⁷, sāksāt³⁸. tathā hi –

dhūmād³⁹ atrāgnir astīti vacanena prakāśyate |
sarṃbandhamātraṃ⁴⁰ dhūmas tu pratyakṣeṇa⁴¹ prakāśitaḥ ||5||

5 (468) tataḥ trirūpalingākhyānaṃ² parārtham anumānaṃ⁴² iti⁴³ pramāṇasamuccayavṛttir virudh-
yate.

nedam upapannam. yataḥ

smaraṇārthaṃ vacaḥ sarvaṃ tatas⁴⁴ tatra pramābhidhā⁴⁵ |
pratyakṣeṇa⁴⁶ pratīte tu vyarthatā vacasaḥ sadā ||6||

10 uktam etat – viduṣāṃ vācyaḥ hetur eva hi kevalaḥ.⁴⁷ tathā pratibandho 'pi kevala ity api
draṣṭavyam⁴⁸.

atha vā, tatrāpi bhrāntivyudāsāya⁴⁹ dhūmo 'yam iti paravacanam⁵⁰ apekṣyata⁵¹ eva. tathā hi

15 mamāyaṃ niścayād dhūmaḥ³ pratipattim ihāgataḥ |
kasmād bhrāntis tavātrāpi pareṇaivaṃ prabodhyate⁵² ||7||

ayam artho vacasaḥ – na tatra pratyakṣadṛṣṭo⁵³ 'rtho 'nyasmai vacanena khyāpyate, api tv
anumānam eva tat parārthaṃ tatkāraṇatvāt⁵⁴. dhūma evāyam, nānyathā draṣṭavyaḥ⁵⁵. yaḥ
prāg dhūma⁵⁶ upalabdhas tato 'nyathā na bhavaty ayam. sāmartyād idam uktaṃ bhavati –
tallakṣaṇatvāt⁵⁷. tasmād anumānavṛttam⁵⁸ eva⁴ śabdena khyāpyate. na⁵⁹ kadācit pratyakṣe

³⁵ mngon sum gyi yul la Y 5b7 : mngon sum ma yin pa'i yul la T 145b8f.

³⁶ pravartamānaṃ em. (cf. 'jug na T 146a1, 'jug pa ste gsal ba na Y 5b8a.) : pravartate Ms, S.

³⁷ prakāśyate Ms, Sb : prakāśate S.

³⁸ tshig gi 'bras bu'i gtan tshigs gsal ba ni ma yin no T 146a1, Y 5b8f.

³⁹ du ba la T 146a1.

⁴⁰ sambandha° Ms, metri causa : pratibandha° S.

⁴¹ mngon sum nyid kyis T 145a2.

⁴² parārtham anumānam Ms (cf. gzhan gyi don gyi (D : don gyi lacks P) rjes su dpag pa T 146a2) : parārthānumānam S.

⁴³ Cī. tshul gsum pa'i rtags brjod pa ni gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa ste PSV[V] 40b2; PSV[K] 124b3f.

⁴⁴ tatas Ms : tataḥ S.

⁴⁵ tshad brjod kyi T(D) 124a2 : tshad brjod kyis T(P) 146a3.

⁴⁶ mngon sum gyis Y 5a6 : mngon sum gyi T 146a3.

⁴⁷ Cī. PV I 27'cd.

⁴⁸ yang blta bar bya ba Y 6a7 : api n.c. T 146a4.

⁴⁹ 'vyudāsāya Ms : 'vyudāsārthaṃ S.

⁵⁰ para° n.c. T 146a5.

⁵¹ apekṣyata S (cf. ltos par bya ba T 146a5) : apekṣata Ms, Sb.

⁵² 'dir yang ci'i phyir khyod 'khrul ces || de ltar gzhan gyis rtags par byed || T 146a5.

⁵³ mngon sum gyis mthong ba'i T(D) 124a4 : mngon sum gyi mthong ba'i T(P) 146a6.

⁵⁴ tatkāraṇatvāt S (cf. de'i rgyu yin pa'i phyir T 146a6) : tat<?>kāraṇatvāt Ms : tat<svabhāvānumāna>kāraṇatvāt Mb.

⁵⁵ draṣṭavyaḥ Ms, Sb : draṣṭavyam S.

⁵⁶ dhūma n.c. T 146a7.

⁵⁷ de'i Y 6b6 : de ni mtshan nyid can yin pa'i phyir ro T 146a7.

4

śabdasya⁶⁰ vyāpāraḥ, atyantābhyāsāt tu nānumānaṃ prapañcanam⁶¹ iti lokasyānyathā⁶² pratibhāti⁶³, tasmād vacanam anumānakāraṇatām eva svīkartum alam.

svabhāvānumānam eva tarhi⁶⁴ vacanaṃ tatkāraṇatvāt, na kāraṇānumānam – atra dhūma itī⁶⁵, svabhāvānumānatvād vacanasya.

5 tad asat.

svārthānumāne 'pi, hi dhūmarūpe svabhāvahetuḥ patito⁶⁶ 'ntarāle |⁶⁷
tatrāpi na bhrāntinivṛttir asti svabhāvahetor virahād vivektuḥ ||7a||

atrāha –

virodhaḥ ka ivātrāsti kāryahetur na hīyate |⁶⁸

10 vyavadhāne 'pi naivāsau vijahyāt kāryahetutām ||8||

svārthānumāne kāryahetur asty evety⁶⁹ etāvati vivakṣite vyavadhānopadarśanaṃ kvopayogi. parārthānumāne tu kāryahetur eva na saṃbhavati, sāksāt svabhāvahetau dhūmād iti vacanasya⁷⁰ vyāpārāt⁷¹. tato 'gnyānumāne na⁷² parārtham anumānam.

naitad asti.

15 yathāsaṃbhavam āśritya parārthasyānumānatā |
uktā śāstrakṛtā sā tu ma bhūd anyatra⁷³ kā kṣatiḥ ||9||

atha vā, yatra bhrāntir nāsti, tatra svārthānumāne⁷⁴ 'vyavahita eva kāryahetuḥ. parārthānumāne 'pi saiva gatiḥ itī sāksād evāsty anumānasya śabdād udayaḥ.

bhrāntyā vinā, kiṃ vacaneneti cet⁷⁵.

20 pratibandhapradarśanāyeti na doṣaḥ, trirūpalingākhyānaṃ⁷⁶ tu yathāsaṃbhavam iveti⁷⁷

⁵⁸ rjes su dpag pa'i tshul T(D)124a5 : su dpag pa'i tshul T(P)146a7.

⁵⁹ na S : tena na Ms.

⁶⁰ sgras T 146a8.

⁶¹ nānumānaṃ prapañcanam *em.* (*cf.* rjes su dpag pa spros pa ma yin T 146a8) : nānumānaprapañcanam Ms, S.

⁶² 'jig rten las gzhan du T 146a8.

⁶³ pratibhāti {h} Ms.

⁶⁴ tarhi n.c. T 146b1.

⁶⁵ du ba yod de ces bya ba T(P) 146b1 : du ba yod do zhe bya ba T(D) 124a7.

⁶⁶ patito Ms, Sb, *metri causa* (*cf.* 'jug T 146b2, Y 7a3) : patito S.

⁶⁷ rang don rjes su dpag pa'i dus su (D : su *lacks* P) yang bar du rang bzhin gyi gtan (tshigs 'jug go || gang du zhe na | du ba'i rang bzhin la ste | Y 7a3 : rang don rjes dpag du ba la'ang (D : rjes su dpag pa du ba'ang P) || bar du rang bzhin gtan tshigs 'jug (D : 'jug pa P) T 146b2.

⁶⁸ 'di la 'bras bu'i gtan tshigs ni || mi nyams 'gal ba ci zhig yod || T 146b2f.

⁶⁹ ces T(P) 146b3 : zhes T(D) 124b1.

⁷⁰ dhūmād iti vacanasya Ms (*cf.* du ba yod pa'i phyir ro zhes bya ba'i tshig T 146b4) : dhūmādivacanasya S.

⁷¹ yod pa yin pa'i phyir ro T 146b4f.

⁷² 'gnyānumāne na Ms (*cf.* me rjes su dpag pa la (D : las P) ... med do T 146b5) : 'sty anumānena S.

⁷³ gzhan la J 262a3, Y D6b4 : anyatra n.c. T 146b5f.

⁷⁴ rang gi don gyi rjes su dpag pa'i der T(D) 124b4 : rang gi don gyi rjes su dpag pa der T(P) 146b6.

⁷⁵ cet Ms (*cf.* zhe na T 146b7) : ceti S.

5

saṃpraty evoktam.

kiṃ ca,

vacaso⁷⁸ na pramāṇatvam anumātvaṃ vinā kṛtam⁷⁹ |
etāvad evābhipretam⁸⁰ na tu sarvaṃ vacas tathā ||10||

5 ya āha – kathaṃ pratyakṣānumānāyor eva⁸¹ prāmāṇyam, vacanasyāpi, vyavahārahetutvāt.
na vacanam antareṇa paripūrṇo lokavyavahāraḥ.

(469) atrocyate –

pratyakṣa_{|232b}m anumānaṃ ca vacanaṃ ca⁸² vinā na kim |
vyavahāro 'stī lokasya kiṃ tasyāpi⁸³ pramāṇatā ||11||

10 paridīṣṭapūrvam artham smṛtvāpi pratyakṣādikam antareṇa⁸⁴ kiṃ na pravartate. kim idānīm
smaraṇam api pramāṇam⁸⁵. atha tad⁸⁶ apramāṇam eva⁸⁷, vacanam api tathārthaṃ na pra-
māṇam iti samānam. yatra tu pramāṇam, tatrānumānakāraṇatvenaiva, nānyathā. etāvan-
mātram atra vivakṣitam, na tu sarvaṃ vacanaṃ sarvānumānakāraṇam. vacanasyānu-
mānatva_{2m}⁸⁸ etat⁸⁹, na svātantryeṇa⁹⁰ pramāṇatvam. sarvānumānatvapratipādanaṃ tu nopa-
15 yogi. tasmāt trirūpalīṅgākhyānam eva vacanam⁹¹.

vedavacanasya tarhi kathaṃ pramāṇatā.

tatrāpi pratyakṣānumānārthakathanād eva pramāṇatā dvādaśa māsā saṃvatsara⁹² ityādau,
anyatrāpramāṇataiva⁹³, yathā puruṣavacasi.

apauruṣeyatvād⁹⁴ eva pramāṇateti cet⁹⁵.

⁷⁶ tshul gsum pa'i rtags yod pa ston pa T 146b7.

⁷⁷ iveti *em.* (cf. bzhin no zhes T 146b7) : eveti Ms : iti S.

⁷⁸ tshig la T 146b8, J 262a5 : tshig las Y 8b7.

⁷⁹ anumātvaṃ vinā kṛtam *em.*, *metri causa* (cf. rjes su dpag pa'i rgyus byas pa'i rjes su dpag pa nyid de med par ni Y 8a6f.) : anumātvaṃvinā kṛtam S : anumānatvaṃvinā kṛtam Ms : rjes su dpag pa med par ni T 146b8.

⁸⁰ de tsam nyid geig mngon 'dod kyi T 146b8.

⁸¹ gnyis T 147a1.

⁸² vacanaṃ ca *lacks* Ms.

⁸³ tasyāpi Ms (cf. de yang T 147a2) : tasyāsti S.

⁸⁴ med pa T 147a2.

⁸⁵ tshad ma yin nam T(D) 124b7 : tshad ma yin T(P) 147a2.

⁸⁶ tacl *n.c.* T 147a2f.

⁸⁷ eva S (cf. nyid T 147a3) : *lacks* Ms.

⁸⁸ tshig gi rjes su dpag pa nyid de Y 9a2 : tshig ni rjes su dpag pa nyid de T 147a4.

⁸⁹ etat *em.* (cf. de T 147a4, Y 9a2) : eva Ms, S.

⁹⁰ rang rgyud kyi ni Y 9a3 : rang rgyud nyid ni T 147a4.

⁹¹ de'i phyir tshul gsum pa ston pa'i tshig nyid do T 147a5.

⁹² saṃvatsara Ms (cf. lo T 147a5) : *lacks* S.

⁹³ eva *n.c.* T 147a6.

⁹⁴ skyes bus ma byas pa nyid kyi T(D) 125a3 : skyes bus ma byas nyid kyi T(P) 147a6

⁹⁵ tshad ma yin no zhe na T 147a6; rig byed tshad ma yin no zhe na Y 9a8.

6

na, apratyayāt⁹⁶. na hi vacanamātrāt⁹⁷ kasyacit sampratyayaḥ. yadi , ca⁹⁸ pratyakṣavad
vedaḥ, kiṃ na sarvaḥ pratyeti.

kṣaṇikatvādyanumānād⁹⁹ api na sarvaḥ pratyeti. bhrāntiā ced atrāpi bhrāntiḥ.

tajjātīyānumānena sampratyayasthānena¹⁰⁰ nivartyate 'numāne, vede tu na tajjātīyava-
5 canatvenety asamānam etat.

anvayapratibaddhatve¹⁰¹ 'numānasya pramāṇatā |
vede tu nānvayo dṛṣṭa iti¹⁰² pūrvam vicāritam ||12||

atha vā, ayam aṛthaḥ -- vacanaṃ trirūpaliṅgākhyānarūpam¹⁰³ eva parārthānumānam¹⁰⁴, na
vedavacanam, tasya trairūpyābhāvāt. tasya hi satyatvānvayo na dṛṣṭo na pakṣadharmatvam¹⁰⁵.
10 tathā hi – apauruṣeyatvenāsatyatvād¹⁰⁶ vyāvṛttam¹⁰⁷, satyatvena tu nāsty anvayaḥ.

atha dvādaśa māsā ity¹⁰⁸ anvayaḥ.

atrocyate –

agnihotrādivākyasya na vedatvaṃ viniścitam |
pauruṣeyatvam apy asya sambhaṣvāt kenacit kṛteḥ¹⁰⁹ ||13||

15 kadācid apauruṣeyamadhye¹¹⁰ kenacid etat pātitaṃ bhavet. śrūyate ca kvacic chākhāntare
kṛtatvam.

smaraṇe sa tathāvyavahāra¹¹¹ iti cet.

na, apratyayāt. anyatrāpi prasaṅgāt. etac ca sakalaṃ pratipāditam eva prāg iti na
prapañcitam ihety āstām.

⁹⁶ apratyayāt Ms.

⁹⁷ tshig tsum gyis T 147a7.

⁹⁸ ca Ms : lacks S : n.c. T 147a7.

⁹⁹ skad cig ma nyid la sogs pa'i bzhin du | rjes su dpag pa las T 147a7.

¹⁰⁰ sampratyaya° Ms : sapratyaya S.

¹⁰¹ rjes 'gro dang ni 'brel pas na T 147b1; 'brel pa yin pas na Y 10a3.

¹⁰² rig byed la ni rjes 'gro dag || mthong bas med ces T 147b1.

¹⁰³ tshul gsum pa ston pa'i tshig T 147b1f.

¹⁰⁴ parārthānumānam S; gzhan gyi don gyi (P : don gyi lacks D) rjes su dpag pa T 147b2 : parārtham anumānam? Ms.

¹⁰⁵ de lu ni bden pa nyid rjes su 'gro ba mthong ba med pa dang phyog kyi chos kyang mthong ba med pa nyid do T 147b2f.

¹⁰⁶ skyes bus ma byas pa nyid kyis T(P) 147b3 ; skyes bus ma byas pa nyid kyang mi bden pa nyid kyis T(D) 125a6.

¹⁰⁷ vyāvṛttam Ms?, Sb (cf. ldog pa T 147b3) : vyākhyā(?)am S.

¹⁰⁸ zla ba bcu gnyis lo (D : po P) yin no zhes bya bas T 147b3.

¹⁰⁹ sambhavāt kenacit kṛteḥ em. (cf. 'ga' zhig gis byas par srid pa'i phyir Y 10b2) : sambhavet kenacit kṛteḥ Ms, S : 'ga'
zhig gis ni byas pas 'di || skyes bu byas pa nyid du rtogs T 147b4.

¹¹⁰ apauruṣeyamadhye S (cf. skyes bus ma byas pa'i nang du T 147b4) : apauruṣeyatvenāsatyatvān madhye Ms.

¹¹¹ smaraṇe sa tathāvyavahāra Ms (cf. de ltu bu'i tha snyad de ni (P : ni lacks D) dran na yin no T 147b5, Y 10b4f. : smaraṇe
satī tathāvyavahāra S.

和訳と訳註

自己のための推理の直後に他者のための推理が説かれる。なぜならば、他者のための推理は自己のための推理を前提としているからである¹。その場合²、

「他方、他者のための推理は³、自身によって認識された事象を説明する手段である。」⁴ (Pramāṇasamuccaya III 1ab)

「自身によって認識された (svadṛṣṭa)」とは⁵、自らによって認識された、ということであり、論者と対論者の両者によって、すなわち、教示される者と教示する者の両者によって、自身によって認識された (事象) に関して、という意味である⁶。もしも審判者達が存在するならば⁷、

* PVA 本文の解釈に際しては、当該箇所に対するヤマール註 (cf. Y (P) Tse 1b5-10b6; (D) Tse 1b1-9a6; 脚註に掲げた location は北京版のもの) に大幅に依拠した。その全文を順次以下の訳註に掲げて [] 内に和訳を付す。他方、当該箇所に対するジャヤンタ註 (cf. J (P) Ne 260b5-262a8; (D) Ne 222a1-223a6; 同じく脚註に掲げた location は北京版のもの) は、冒頭の『プラマーナ・ヴァールツィカ』の章の順序に関する議論を除いては極めて簡潔かつ断片的であるが、参考のため、やはり全文を順次以下の訳註に掲げておいた。但しジャヤンタ註チベット訳の晦渋さは当該箇所においても相変わらずで、和訳は時に試訳の域を出ない。なお二人の註釈者が同一箇所に関して註釈している場合は、年代の早いジャヤンタ註を先置する。因みに両註釈に関しては、恣意に陥ることを可能な限り避けつつも、文脈だけを根拠にテキストを修正して読んだ箇所が幾つかある。それらの修正の妥当性の検証は将来の両註釈の梵文原典の出現を俟つかない。

¹ このプラジュニャーカラグプタの言明は、いわゆる『プラマーナ・ヴァールツィカ』章順問題における Pramāṇasiddhi 第 1 章論者の論拠の一つである。この議論については本論文末尾の補註を参照。

² Cf. *gal te de ltar gyur na gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa de ci 'dra ba zhig tu nam par gnas zhes dogs pa bsu nas slob dpon gyi thugs la gnas pa'i mtshan nyid brjod pas | de la zhes bya bu ste rang gi don gyi rjes su dpag pa'i de ma thug par gyur pa na'o // Y 3a5f.* [= もしも以上のようなならば、その他者のための推理は、どのようなあり方で定立されるのか、と疑問を呈して、(ダルマキールティ) 師の念頭にある (ディグナーガの) 定義を述べて、「その場合」と、(他者のための推理が) 自己のための推理の直後にある場合、である。]

³ Cf. *gzhan don rjes su dpag pa ni | rang gis mthong ba'i don rab tu gsal bar byed pa nyid du nam par gnas kyi | lung (D: lug P) la sogs pas gzhan gyis (D : gyi P) mthong ba rab tu gsal bar byed pa ni ma yin no zhes bya ba'i don to // rang gis (D : gi P) mthong ba'i don ni tshad mas mthong bu'i tshul gsum pa'i rtags te | de (P : de lacks D) rab tu gsal bar byed pa'o // Y 3a6f.* [= 「他方、他者のための推理は」自身によって認識された事象を説明する手段として定立されるのであり、聖典等をとおして他者によって認識された (事象) を説明する手段なのではない、という意味である。「自身によって認識された事象」とは、認識根拠によって認識された三条件を備えた論証因であり、(他者のための推理は) それを説明する手段なのである。]

⁴ Cf. *rang gis mthong ba ni mngon sum dang rjes su dpag pas mthong ba'o // 'dis rab tu gsal bar byed pa'i phyir rab gsal byed pa yin te | nges par byed pa yin gyi tshig tsam las ni ma yin no // rang gis mthong don zhes bya ba'i rjes su 'jug pas rang gis mthong ba'i don las gsal bar byed pa yin no zhes grub pa'o // rang gis zhes bya ba ni bdag nyid kyi so // J 261a7ff.* [= 「自身によって認識された」とは、直接知覚と推理によって認識された、ということである。それによって説明するから、「説明する手段」、つまり確認する手段なのであって、ことばのみに基づくのではないのである。「自身によって認識された事象」という文脈により、自身によって認識された事象に基づき説明する手段であることが成り立つ。「自身によって」とは、自らによって、という意味である。]

⁵ Cf. *'dis gsal bar byed pa na zhes bya ba'i bshad pas ni (D : na P) tshig la sogs pa bzung ngo // 'di nam par 'grel pa ni rang gis (em. : gi PD) zhes bya ba ste rgol ba la sogs pa'i bdag gis so // Y 3a7f.* [= 他方、「それによって説明される場合に」という註釈によって、ことば等が (他者のための推理であることが) 理解される。このことを説明するために、「自身によって」と、論者等自身によって、である。]

⁶ Cf. *de nyid kyi (D : kyi lacks P) phyir rgol ba dang phyir rgol ba rang gis zhes gsungs so // gang gi (D : gis P) tshes rgol ba yang dag pa'i sgrub byed brjod pas ston par byed pa de'i tshes phyir rgol ba yang dag pa ma yin pa'i nyes pa brjod pa'i phyir*

(その場合には) 彼らによっても (自身によって認識された事象、とすべきである)⁸。彼らにも資格があるのだから。一方、異なった見解の排除は含意に基づいてのみ了解される⁹。自身によって認識された事象が、他者に対してそれ (= 他者のための推理) によって説明される (から、他者のための推理は説明する手段である)。そしてそれ (= 説明する手段) は身振りとことばによる表現という形をとる¹⁰。その (定義) 中で、「自身によって認識された事象」

*bstan par bya ba nyid yin la / gang gi tshé (em. : tshé lacks PD) phyir rgol ba yang dag pa'i nyes pa brjod pas (D : brjod par byed pas P) ston par byed pa yin pa (D : yin pa lacks P) de'i tshé na (P : ni D) / rgol ba ma dag pa'i sgrub par byed pa brjod pas bstan par bya ba kho na'o // des na rgol ba dang phyir rgol ba bstan par bya ba dang ston par byed pa dag rang gis rab tu gsal bar byed pa zhes bya ba la bkos so // de dag gis (D : gos P) ci zhig rab tu gsal bar byed snyam na / rang gi mthong ba zhes bya ba'o // Y 3a8ff. [= 正にそれゆえに、「論者と対論者の両者自らによって」と言う。論者が正しい論証を陳述することによって教示する者である場合には、対論者は正しくない論駁 (*dūṣṭā?) を陳述するのであるから、教示される者に他ならないが、対論者が正しい論駁を陳述することによって教示する者である場合には、論者は正しくない論証を陳述するのであるから教示される者に他ならないのである。従って、「論者と対論者の両者によって、すなわち、教示される者と教示する者の両者によって、自身によって」説明する手段、と関係する。彼らは何を説明するのか、というならば、「自身によって認識された (事象)」と。] なお、デーヴェンドラブッディは「自らによって認識された」ということが「自身によって認識された」であると註釈し (Cf. *bdag nyid kyis mthong ba ni rang gis mthong ba'o* PVP 269a1)、シャーキヤブッディの復註はさらに、「自らによって認識された」とは論証を立論する論者によって (認識された) ということ (Cf. *bdag nyid kyis zhes bya ba ni rgol ba gang gis bsgrub par dgod pa'o* PVT 252b2) と説明している。従って、*sva*-の語を論者と対論者の双方、場合によっては第三者をも意味し得るとする解釈は、恐らくプラジュニャーカラグプタの新機軸である。ウィブーティチャンドラも、このプラジュニャーカラグプタの解釈に注意を払っている (Cf. PVV 413; footnote 3)。*

¹ Cf. *gal te gzhan gyi don gyi (D : don gyi lacks P) rjes su dpag pa gang yin pa 'di dag kho na la rang gis mthong ba rab tu gsal bar byed pa yin nam snyam na / gal te zhes smos so // Y 3b3f. [= およそ他者のための推理とは、これら両者においてのみ自身によって認識された (事象) を説明する手段であるのか、と考えて、「もしも」と言う。] なお、クマーリラが、この「審判者」の概念をディグナーガの「他者のための推理」の範疇を批判する際に持ち出している (cf. ŚV Nirāmbanavāda 章 v.70;146; 寺石悦章「他者のための推理 (parārthānumāna) に関するクマーリラの見解」、『哲学・思想論叢』第 13 号、1995: 33ff.)。プラジュニャーカラグプタの叙述は、このクマーリラの議論を受けたものと思われる。彼は PVA 「直接知覚」章におけるクマーリラ批判の文脈でクマーリラの「審判者」の概念を検討している (cf. PVA II v.844=ŚV Nir. v.70; v.850ff.)。PVA 171,18 にもこの概念が登場する (稲見正浩・野武美弥子・林慶仁・護山真也「プラジュニャーカラグプタにおける二種の認識対象と認識手段」、『南都仏教』、第 81 号、2002: 11; 39 参照)。なお、この概念は我々が次回に考察するであろう PVA の「他者のための推理」章第 21-25 偈付近でも盛んに用いられるので、その際に再び検討したい。*

⁸ Cf. *de dag rams kyī yang zhes bya ba ni byed pa po'i drug pa'o // J 261b1. [= 「彼らによっても」というのは、動作者 (*karī) の属格である。]; de'i tshé zhes khong nas byung ta / de dag rams kyang zhes sbyar te drug pa 'di yang byed pa lu sogs su yin no // de dag 'ba' zhig rang (D : rang lacks P) gis mthong ba gsal bar byed pa yin par ni ma zad de / de dag gis mthong ba'o // Y 3b4f. [= その場合には、と補って解釈し (*adhyāhāra) つつ、「彼らによっても」と連結する。これは属格ではあるが、動作者等としてである。彼ら二人 (= 論者と対論者) のみによって自身によって認識された (事象) を説明する手段であるに留まらず、彼ら (= 審判者) によって認識された (事象) なのである。]*

⁹ Cf. *log par rtogs pa'o zhes bya ba ni rang gis mthong ba'i don gyis bzlog par bya bu yin no // J 261b1. [= 「異なった見解である」というのは、「自身によって認識された事象」(という語) によって否定されている。(?)]; gal te mtshan nyid bstan pa ni log par rtog pa bsal (D : gsal P) ba'i ched kho nar ma yin nam / 'dis ni lung las gzhan gyis mthong ba yang sgrub par byed pa yin no zhes bya ba'i log par rtog pa bsal ba ma yin no // des na mtshan nyid 'dis log par rtogs pa zhes gsungs so // shugs nyid las zhes bya ba na rang gis mthong ba'i don smos pa'i shugs las // lung las mthong ba rab tu gsal bar byed pa rjes su dpag pa yin no zhes bya ba'i log par rtogs pa bsal ba yin no // Y 3b5ff. [= 定義を示すことは異なった見解を排除するために他ならないのではないか? しかし、この (定義) によっては、聖典に基づいて他者 (自身) によって認識された (事象) も論証因である、という異なった見解は排除されない (という疑問がある)。従って、この定義によって「異なった見解」と言う。「含意に基づいてのみ」とは、「自身によって認識された事象」という語の含意に基づいて、聖典に基づいて認識された (事象) を説明する手段が推理である、という異なった見解は排除されているのである。]*

¹⁰ Cf. *de yang zhes bya ba ni gsal bar byed pa'o // J 261b1f. [= 「そしてそれは」とは、説明する手段は、である。]; de yang zhes bya ba / des na rang bzhin gyis ka yang gsal bar byed pa yin no // Y 3b7. [= 「そしてそれは」と。従って、二つの形をとる (表現) は共に、説明する手段である。] チベット訳の解釈も、ヤマーリの説明と軌を一にする、*

とは三条件を備えた論証因のことである¹⁴。

(反論：)「三条件を備え、かつまた論証因である」ということは何に基づくのか¹⁵。なぜならば、「自身によって認識された事象」という語は、あらゆる事象を指し示すことがあり得るからである¹⁶。それゆえ¹⁴、知覚し得ない状態にある (*parokṣarūpa*) あらゆる推理対象を他者に対して説明するのが他者のための推理である、ということになるだろう。

(回答：¹⁵) これに対して言う。

「三条件を備えた論証因とは別のもの (= 推理対象) について説明する手段は存在しない¹⁶。それ (= 推理対象) は他者には了解され得ないから、(他者のための推理は推理対象を) 説明する手段ではない¹⁷。」(1)

¹⁴ Cf. *rang gis mthong ba'i don ni gsal bar byed pa'i gnas skabs las tshul gsum yin te gzhan gyis mi nus pa'i phyir ro zhes bstan pa ni tshul gsum pa'i zhes bya ba'o* // J 261b2. [= 「自身によって認識された事象」とは、説明する手段という論題に基づき、三条件を備えたものである。他のものによっては (推理対象の了解は) 不可能だからである。(以上を) 示して、「三条件を備えた」という。]; *gang zhig gsal bar byed pa rang gis mthong ba de gang yin snyam na / rang gis mthong ba'i don zhes gsungs te / don med pa ni ma yin no zhes bya ba'i don to // 'dis ni rtog pas sgro btags pa rtags ma yin no zhes brjod pa yin no // don yin yang thams cad ni ma yin no zhes ston pa ni tshul gsum pa'i zhes bya ba'o* // Y 3b7ff. [= 説明する者自身によって認識されたものとは何か、と考えるならば、「自身によって認識された事象」と言う。非事象 (**anartha*) ではない、という意味である。この(語)によって、概念知によって虚構されたものは論証因ではない、と言われているのである。しかしながら、事象であるにしても全ての(事象)ではない、ということを示すために、「三条件を備えた」という。]

¹⁵ Cf. *gal te zhes bya ba la sog pas ni tshul gsum pa dang / rtags zhes gang brjod pa de gnyi ga yang pha rol po spong (D : song P) bu'o* // *tshul gsum pa zhes bya ba ga las yin la / rtags zhes kyang ga las yin zhes so sor 'brel to* // Y 4a1f. [= 「もしも」云々によって、「三条件を備えた」と「論証因」と言われた、その両者を共に反論者は否定する。「三条件を備えた」ということは何に基づくのか、「論証因」ということもまた何に基づくのか、と各々結びつく。]

¹⁶ チベット訳: 「自身によって認識された事象一般を…」。Cf. *bsgrub par bya ba 'di la pha rol po gtan tshigs smru ba ni rang gis mthong ba doa (D : don lacks P) smos pa ni zhes bya ba'o* // *don tsam yin pas rjes su dpag par bya ba yang ston pa yin pa'i phyir ro // gang gi tshes rjes su dpag pa po du ba la sog pa las me la sog pa'i don rtogs pa de'i tshes de rang gis mthong bu yin pa'i phyir de (D : de lacks P) yang rang gis mthong don smos pas ston pa yin par 'gyur ro* // Y 4a2f. [= 以上の論証対象に関して反論者が論証因を陳述して、「自身によって認識された事象という語は」と。(その語は) 事象一般であれば推理対象をも指示するのであるから。推理する者(自身)が煙等に基づいて火等の事象を認識する場合に、それ (= 火等) は自身によって認識されたものであるから、それ (= 火等) をも「自身によって認識された事象」という語によって指し示すことがあり得るのである。]

¹⁴ Cf. *de las cir 'gyur zhe na / des na zhes smos so* // Y 4a3. [= それでどうなるのか、といえ、それゆえと言う。]

¹⁵ Cf. *lan ni 'di la brjod pa zhes bya ba'o* // *gang zhig gzhan gyi don gyi rjes su dpag par 'gyur ba gzhan gyi ste rjes su dpag par bya ba'i gsal byed ni yod pa ma yin no // 'on kyang tshul gsum pa'i rtags nyid kyi (em. : kyi PD) gsal (D : bsal P) bar byed pa yod pa yin (D : ma yin P) no* // Y 4a3f. [= 答えて、「これに対して言う」と。何らかの、他者のための推理となりうるような、「別のものについての」つまり推理対象についての「説明する手段は存在しない」のである。そうではなくて、三条件を備えた論証因のみについて、説明する手段は存在するのである。]

¹⁶ Cf. *bsgrub bya lu ni the tshom zu ba yin la / sgrub byed ni nges pa yin gsal bar byed pa dang rjes su dpag pa'i don yin gyi gzhan du ni ma yin no zhes bstan pa ni tshul gsum pa'i rtags las zhes bya ba'o* // J 261b2f. [= 論証対象には曖昧さがある一方で、論証因は確定しており、説明手段と推理の対象であって、他のあり方ではない、ということを示して、「三条件を備えた論証因とは」と。(?)]

¹⁷ Cf. *gzhan la gsal bar byed pa med pa'i rgyu gang (em. : tsum PD) zhe nu / de ni zhes bya ba smos so // gang gi phyir bsgrub par bya ba'i rang bzhin de ni brjod kyang gzhan gyis rtogs par bya ba mi nus pa de'i phyir na bsgrub par bya ba ni gsal bar byed pa yod pa ma yin no // nus pa brjod pa'i tshig ni gsal byed yin te tshad mas grub pa'i don brjod pa'i phyir ro // mi nus pa brjod pa'i tshig ni gsal byed ma yin te bzlog pa'i phyir ro* // Y 4a5f. [= 別のものについての説明する手段が存在しないことの原因は何か、といえ、それは」と言う。論証対象というあり方を有するそれは、たとえ陳述されたとしても他者には了解され得ないから、従って論証対象に関しては説明する手段は存在しない。すなわ

すなわち、あるものに関して他者に正しい了解が（生じる時）、それは説明された、と言われる¹⁸。正にそれゆえに¹⁹、pra-という（接頭）語は「卓越」を表わして、そして認識根拠によって了解されている（事象）に関しては、他者に正しい了解がある²⁰。そして、もしも推理対象もまた認識根拠によって了解されているならば²¹、その場合には議論の余地は全くない²²。しかし、三条件を備えた論証因の説明を通じて（初めて）議論の対象となっている推理対象の了解があるのだから、（三条件を備えた論証因を説明する手段である）ことばは無意味ではない²³。そこ（＝ことば）から推理が生じるのだから、それ（＝ことば）もまた推理である。なぜならば（原因たることばに結果たる推理を）仮託しているからである²⁴。²⁵

ち、（論証）能力あるものを陳述することば（＝論証因）は、認識根拠によって成立している事象を陳述するのだから説明する手段であるが、他方、（論証）能力のないものを陳述することば（＝主張命題）は、説明する手段ではない。逆（命題）があるから。] Cf. PV IV 15-17cd.

¹⁸ Cf. *gal te bsgrub par bya ba brjod pa ci ltar gsal bar byed pa ma yin zhe na / gang la zhes smos so // don gang la bstan par bya ba gzhān no // Y 4a6f.* [＝もしも、論証対象を陳述することが、どうして説明する手段ではないのか、というならば、「あるものに関して」と言う。ある事象に関して教示される他者に、である。]

¹⁹ Cf. *de nyid kyi phyir zhes bya ba ni gzhān yid ches pa'i yul la gsal bar byed pa zhes brjod pa do nyid kyi phyir ro // Y 4a7f.* [＝「正にそれゆえに」とは、「他者に正しい了解」の対象領域を説明する手段である、という、正にその言明のゆえに、である。]

²⁰ Cf. *rab kyi tshig ces bya ba ni rang gis mthong don rab gsal byed ces bya ba 'dir rub tu sbyar ba'o // tshad mas ma rtogs pa la bftos nas tshad mas rtogs pa yang khyad par du 'phags pa yin no // gzhān ni bstan par bya ba'o // Y 4a8f.* [＝「pra-という（接頭）語」というのは、「自身によって認識されたものを説明する手段」というこの（文章）に関係する。また、認識根拠によって認識されていないものと比較して、認識根拠によって認識されたものは卓越しているのである。「他者」とは教示される者である。]

²¹ Cf. *de lta na (D : ni P) 'o na bsgrub par bya ba yang gzhān dag tshad mas rtogs pa yin no // des na de la yang rab tu gsal bar byed pa yod do snyam na / gal te zhes smos so // yang zhes bya ba ni rtags 'ba' zhiḡ tu ma (D : ma lacks P) zad pa'o // Y 4b1f.* [＝ その場合には他者は論証対象をもまた正しい認識根拠によって了解するのである。従って、そこ（＝論証対象の陳述）にも説明する手段が存在する、と考えて、「もしも」と言う。「また」とは、論証因のみに限らず、ということである。]

²² Cf. *rtsoḡ pa med pa nyid do zhes bya ba ni bsgrub par bya ba grub zin pa'i phyir na dum bca' ba brjod pa don med do // Y 4b2.* [＝「議論の余地は全くない」というのは、論証対象は既に論証されているのだから、主張命題を陳述することは無意味である。]

²³ Cf. *gal te bsgrub par bya ba grub zin pa'i phyir / ci ltar darn bca' ba brjod pa don med pa de bzhin du rtags brjod pa yang don med par 'gyur te / bsgrub par bya ba ma grub pa'i phyir ro zhe na / tshul gsam pa'i zhes smos so // tshig ces bya ba ni tshul gsam pa'i rtags gsal bar byed pa'o // Y 4b2f.* [＝もしも、論証対象が既に論証されているかゆえに主張命題を陳述することが無意味であるように、同様に論証因を陳述することも無意味となるであろう。なぜならば（それは）論証対象を論証しないのであるから、というならば、「三条件を備えた」と言う。「ことば」とは、三条件を備えた論証因を説明する手段である。]

²⁴ Cf. *de las ni tshig las so do yang ni tshig gis so // Y 4b3f.; rgyu la (em. : las) 'bras bu brtags pa' phyir ro PSV[V] 40b2, [K] 124b4.*

²⁵ Cf. *lung las grub pa don med pa'i tshig la gzhān gyi don gyi (P : gyis D) rjes su dpag pa nyid yin par log par rtogs pa sel ba'i dbang du byas pa'i ngag la ma tshang ba nyid la sogs pa yin par ngol bar mi rigs so zhes bya ba ni // Gyāḡ pa can gyi'o // J 261b3f.* [＝ 聖典に基づいて成立している、非実在である (anartha*) ことばに他者のための推理としての性質がある、という異なった見解を排除することを主眼とするのであって、ことばに不完全性等が存在するという批難は妥当でない、というのがジャヤンタの（見解）である。(?) この文の末尾に添えられた「ジャヤンタの」という一句は注目に値する。註釈者が自身の解釈を自らの名前を掲げて披瀝するのは一般的ではなく、この註釈の成立に関する特異な背景を示唆するものかも知れない。既に別稿で指摘したように、ジャヤンタ註には他所にも同様な表現が頻出する。この表現が用いられる場合、しばしば対立的に「註釈」('grel pa = vfti?) と呼ばれる書物の見解が批判されており、この箇所の批判対象も「註釈」の見解かも知れない。筆者は以前この「註釈」を PVA そのものと考えたが、未だ定見を得るには至っていない (cf. 小野基「仏教論理学派の一系譜 —ブラジュニャーカラグプタとその後継者たち—」、『哲学・思想論集』第 22 号、筑波大学哲学・思想学系、1996: 142-162)。

(反論:) もしも推理を生ぜしめるという理由で、ことばが(他者のための)推理であるならば、直接知覚を生ぜしめるという理由で、(ことばは)他者のための直接知覚でもあることにならう²⁶。

(回答²⁷:) これは正しくない。

「ことばに基づいて既に把握されている結合関係の想起が存在する場合には、(主題所属性の把握に基づき、三条件を備えた)ことばから推理が生じるが、同じようにして(ことばから)直接知覚が生じることは決してない。²⁸」(2)

「(なぜならば)三条件を備えた論証因の想起がある場合には、必ず推理が生じるが²⁹、自身によって認識された事象一般が語られる場合には、直接知覚の知は(生

²⁶ Cf. *gzhan gyi gal te zhes smos te / de'i tshig gzhan gyi don gyi mngon* (D : *gzhan gyis don P*) *du yang 'gyur ro zhes 'brel to* / Y 4b4. [= 反論者は「もしも」と言う。その場合には、ことばは他者のための直接知覚でもあることにならう、という文脈である。] 推理と同様に、直接知覚にも「自己のため」「他者のため」の二分法がなぜ成立しないのか、という問題提起はディグナーガにおいて既に想定されているように見えるが、その箇所とそれに対するジネードラプディ註には、以下でブラジュニャーカラグプタが論じられるような議論は見られないようである (cf. PSV ad PS II 2ab; 北川秀則『インド古典論理学の研究』、鈴木学術財団、1965: 76; *gal te gzang bar bya ba tha dad pas tjes su dpag pa nam pa gnyis su 'byed na de lta' gyur na mngon sum yang mam pa gnyis su dbye bar bya'o zhe na / gsungs pa / rang gi mtshan nyid bstan bya min* // (PS II 2a'b) *zhes pa'o* // PS[D] 84b5f. [= もしも、異なった把握対象によって推理を二種類に区別するならば、その場合には直接知覚もまた二種類に区別されるべきである、というならば、(ディグナーガは)言うー「個物は首語表現できない」と。])。他方、ジャイナ教論理学者はディグナーガの「自己のための推理」「他者のための推理」の分類を受け入れつつ、直接知覚に関しても「他者のための直接知覚」(*parārthaṃ pratyakṣam*)の範疇を認めた。例えば12世紀のジャイナ教論理学者デーヴァスーリの *Pramāṇanayatattvāloka* の「間接知」章では、この範疇が論じられている (cf. 宇野淳『「ブラマーナ・ナヤ・タットヴァローカ」一和訳と解説(3)』、『ジャイナ教研究』、第3号、1997: 13f.)。なお、宇野氏はこの概念の起源をシッダセーナの *Nyāyavātarā* 第10-11偈に求めている。ここでのブラジュニャーカラグプタの議論は、年代関係から見てシッダセーナ批判であるとみて差し支えないのではないかと (cf. 拙稿「仏教論理学派における「内遍充」と「外遍充」ーブラジュニャーカラグプタを中心にー」、『神子土恵生教授頌寿記念論集』、所収予定)。さらに、ジャイナ教と同じくディグナーガの「他者のための推理」の概念を受容したのがヴァイシエーシカ学派のブラジャスタバーダであるが、彼の *Padārthadharmasamgraha* における「他者のための推理」に関する記述 (cf. PBh 264) に対する諸註釈の中には、「他者のための直接知覚」に関連する議論が見られる。特にシュリーダラの次の叙述を参照 (cf. NK 564,3ff.: *prakṛtam anusarāmaḥ - asty evaṃ padānām arthapratipādanam, idaṃ tu na saṅgacchate parārthānumānam iti. liṅgaṃ tajjanītaṃ vā jñānam anumānam, na ca liṅgasya jñānasya ca parārthatvam, anumānavācākasya śabdasya parārthatvād anumānaṃ parārtham ucyate cet, pratyakṣavācākasyāpi śabdasya parārthatvāt pratyakṣam api parārtham ucyeta. tad uktam - jñānād vā jñānahetor vā nūnyasyāsty anumānatā / tayoś ca na parārthatvaṃ praviddhaṃ lokaveda-yoḥ // vacanasya parārthatvād anumānaparārthatā / pratyakṣasyāpi pārārthyam taddvāraṃ kiṃ na kalpyate // iti. utra samādhiḥ - na śabdasya parārthatvāt taddvāram anumānaparārthyam iti vadāmaḥ, api tu yat parārthaṃ pañcāvayavaṃ vākyam tal liṅgapratipādvareṇānumitihetuvād anumānam iti brūmaḥ. nanv evaṃ api liṅgapratipādakasya pratyakṣānumānatāvātāra-prasaṅgaḥ, na prasaṅgas tatra laukikasabdaprayogabhāvāt.*)。なお、この叙述の解釈を含め、「他者のための推理」の概念史の解明には別稿を期したい。

²⁷ Cf. *tshig ni tjes su dpag pa'i rgyu yin pas tjes su dpag pa yin gyi* (P : *gyis D*) *mngon sum ni ma yin te / de'i rgyu ma yin no zhes bstan pa ni ji lta' tshig las zhes bya ba'o* // J 261b5. [= ことばは、推理の原因であるから推理であるが、直接知覚ではなく、それ(=直接知覚)の原因ではない(から)、ということを示して、「ことばに基づいて」と。]; *do ni zhes bya ba ni lan no* // Y 4b4.

²⁸ Cf. *ji* (em. : *ci*PD) *lta' tshul gsum pa'i tshig las bzung zin pa'i 'brel pa dran par gyur pa na / phyogs kyi chos bzung ba las tjes dpag skye ba de bzhin du tshig las mngon sum ni skye ba ma yin no* // Y 4b4f. [= 三条件を備えたことばに基づいて既に把握されている結合関係の想起が存在する場合には主題所属性の把握に基づき、推理が生じるが、同じようにしてことばから直接知覚が生じることは決してないのである。]

²⁹ Cf. *tshig las dran pa yin na bsgrub bya med na mi 'byung ba'i dran pa nyid tjes su dpag pa yin par bstan pa ni tshul gsum zhes bya ba'o* // J 261b5f. [= ことばに基づいて想起がある場合に、論証対象との不可離関係の想起こそが推理で

じ) ない³⁰。(3)

(すなわち³¹) ことば一般に基づいては、他者に直接知覚は生じない³²。

(反論:) 「見ろ、鹿が走っている」という (ことばに基づき³³)、視覚 (という直接知覚) の生起が (他者に) 認識されるのではないか?³⁴

(回答:) 否。その (ことば) においても、推理が直後にあるからである³⁵。すなわち³⁶、

「彼 (= 教示される者) は「見ろ」という具合に、その事象の方を向くことを命じられる。(鹿が走っていることは) 私 (= 教示する者) によって認識されており、

あることを示して、「三条件」と。]; 'di ga las zhe na tshul gsum zhes smos so //Y 4b5.

³⁰ dran pa mngon sum ma yin par bstan pa ni rang (P : rang rig D) gis zhes bya ba'o //J 261b6. [= 想起は直接知覚ではないということを示して、「自身によって」と。]

³¹ チベット訳を参考にした。

³² Cf. gzhan la zhes bya ba ni bstan par bya ba la'o // 'di ni 'di kad ces / tshig ni (D : ni lacks P) gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa'i rgyu yin pas gzhan gyi don gyi (D : don gyi lacks P) rjes su dpag par brjod kyi / gzhan gyi don gyi mngon sum du ni ma yin te / tshig ni mngon sum gyi rgyu ma yin pa'i phyir ro zes bstan pa yin no //Y 4b5ff. [= 「他者に」というのは、教示される者に、である。この(文)によって、ことばは他者のための推理の原因であるから他者のための推理と言われるが、ことばは直接知覚の原因ではないから、他者のための直接知覚とは(言われ)ない、ということが説かれているのである。]

³³ チベット訳における釋格を参考にした。

³⁴ Cf. gal te zhes bya ba la sogs pas ni pha rol po dag gzhan gyi don gyi mngon sum gyi rgyu yin pa'i phyir gzhan gyi don gyi mngon sum yin no zhes ston par byed pa'o // tshig 'di ni mngon sum gyi rgyu yin pa des na tshig 'di gzhan gyi don gyi (D : gyis P) mngon sum yin no zhe na //Y 4b7f. [= 「...でないか」等によって、反論者たちは、(ことばは) 他者にとって事象の直接知覚の原因であるから、他者のための直接知覚である、と説く。すなわち、このことば (= 「見ろ、鹿が走っている」) は直接知覚の原因である。それゆえ、このことばは他者のための直接知覚である、というならば、] 註 26 で言及したデーヴァスーリが挙げる「他者のための直接知覚」の例は、「前方を見よ、ジナの尊像はキラキラ輝く光の宝石の集まりで飾られた装飾品を身につけている」というものである (cf. 宇野、前掲論文)。なお、「見ろ、鹿が走っている」の例文は、後代のジャイナ論書にも現れるが、古くはバルトリハリにより vākyaḥeda を論じる文脈でも使用されている (cf. Vākyaḥedā III 52; 岡田憲尚氏の指摘による)。

³⁵ Cf. lan ma yin te zhes bya ba la sogs pa'o // ma tshang bar mngon sum skyed pa ni ma yin no // ci'i phyir zhe na / ri dags rgyugs pa la bltos zhes brjod pa der yang ngo // (em. : dang yang ngo PD) don 'di yin te / mngon du phyogs par gyur par rung ba nyid la ni mngon sum srid pas khyab par rtogs pa yin te / des na mngon du phyogs par rung ba'i mtshan nyid kyi (P : kyis D) sgrub par byed pa bltos zhes bya ba de ltar rtogs pa las mngon sum skye bar srid pa de rjes su dpog pa skye ba yin gyi / de ma thug par ni mngon sum skye ba ma yin no // des na rjes su dpag pa ni (D : dpag pa ni lacks P) de ma thug pa yin no //Y 4b8ff. [= 答えて、「否」云々と。(原因が) 不完全であれば直接知覚を生ぜしめることはない。何故かといえば、「見ろ、鹿が走っている」というそのことばにおいても、である。次のような意味である。(事象の方を) 向くことの可能性を直接知覚の蓋然性が遍充していることが (想起によって) 認識される。従って、(事象の方を) 向くことの可能性を内裏とする論証因が、「見ろ」という上述の認識に基づいて、その直接知覚が生じる蓋然性の推理を生ぜしめるが、直後に直接知覚を生ぜしめるのではない。従って、推理が直後にあるのである。]

³⁶ Cf. 'di nyid brjod pa ni 'di ltar zhes bya ba'o // ri dags la sogs pa'i don la mngon du phyogs pa / mngon sum srid pas khyab pa bday nyid la ngar mthong ba la rtogs par bya ba ste / bltos zhes bya ba'i tshig 'dis sbyor ba yin no // des na don (D : don lacks P) 'di yin te / gang zhig don gang la (D : las P) mngon du phyogs par gyur ba de ni ma tshang ba dang gags byed pa med na don de mngon sum du byed pa can yin te / dper na khyed dam nga'i sngru gyi gnas skabs bzhin no // khyod kyang don de la mngon du phyogs par rung ba yin no zhes bya ba'o //Y 5a2ff. [= 正に以上のことを説明して、「すなわち」と。鹿などの事象の方を向くことを直接知覚の蓋然性が遍充していることが自らにおける以前の認識において認識され、「見ろ」という、このことばによって命じられる。従って、次のような意味である。およそある事象の方を向く者は、(直接知覚の原因の) 不完全性と遮るものが存在しなければその事象を直接知覚する。例えば、あなたの、或いは以前の私の状態のように。あなたもまた、その事象の方を向く可能性がある。]

そしてそのように（教示される者にも、ことばの）含意に基づいて教示される³⁷。」

(4)

それ（「見る、鹿が走っている」）は「鹿の見える方を向け」という命令のことばである。そして、（教示する者である）私が（事象の方を）向いているのと同様に³⁸、あなたも（向く）。従って、（教示する者と）同じように（事象の方を）向く場合には諸原因（＝諸感官³⁹）の作用がある、ということを想起しつつ（教示される者は）行為するのであるから、（命令のことばは）推理（の原因）に他ならない⁴⁰。それゆえ、推理に基づいて直接知覚の蓋然性（*sambhava*）を思案した上で、（教示される者は）行為するのである⁴¹。

³⁷ Cf. *gal te nges par sbyor bar byed pa po ni nges par sbyor ba'i tshig gis bdag nyid kyī don de la mngon du phyogs pa'i dngos po mi brjod pa ma yin nam / des na bstan par bya bas don de la mngon du phyogs par gyur pa ma gtogs (em. : rtogs PD) par bdag nyid la de mi srid par dogs pa na / de la de'i mngon sum don du gnyer bas 'jug par (D : pa P) mi 'gyur ba kho na'o zhes dogs pa bsu nas brjod pa ni / nga yis zhes bya bas so // de ltar zhes bya ba ni ri dags la sogs pa'i don rtogs pa po ngas rtogs la / bstan par bya ba la yang bstan pa yin no // ci'i phyir zhe na / don gyis zhes bya ba'o // mngon sum gyi don med na mi 'byung ba nyid du khas blangs pa ngōn du 'gro ba can brjod pa'i shugs kyis so // de lta (D : lta P) ma yin na / tshig de brjod par mi 'thad pa'i phyir ro // Y 5a5ff. [= 「命令者は命令のことばによっては自らがその事象の方を向いている状態に言及していないではないか。従って、（命令者が）その事象の方を向いていなくては自らにおいてそれ（直接知覚）は可能でないと懸念する場合には、その（事象の）直接知覚を求める教示される者は、その（命令）に際して決して行為しないだろう」という疑問を呈しつつ、「私によって」（云々）と（彼は）述べた。「そのように」とは、了解者である私によって鹿等の事象が認識されている一方で、教示される者にも教示されている、（ということである）。何故かといえば、「含意に基づく」と。直接知覚された事象との不可離関係の承認を前提としていることばの含意に基づいて、である。そうでなければ、そのことばを述べることはあり得ないからである。]*

³⁸ Cf. *gal te nges par sbyor bar byed pa po mngon du phyogs par gyur pa ci 'dra (D : 'dra ba P) bus mngon sum dang ldan pa de 'dra ba ni nges par sbyor ba tshig las mi 'gyur ba ma yin nam / de ci lta na de'i mngon sum don tu gnyer bu de la 'jug snyam na / mngon du phyogs pa ni zhes bya ba'o / nges par sbyor ba po'i (D : po P) nga'i mngon du phyogs pa ci 'dra ba de lta khyod la yang de 'dra ba kho nar de bzhin du 'gyur ro zhes rtogs par bya ba'i nges par sbyor ba'i tshig gi 'bras bu mngon du phyogs par 'gyur ba ni shugs kyis bstan pa yin no // de lta ma yin par ni mngon sum gyi rgyu nyid du khas blang bar mi thad pa'i phyir ro // mngon sum gyi (em. : gyis PD) rgyu'i phyogs la ni 'di tjes su dpag pa yin no zhes dgongs pa'o // Y 5a8ff. [= もしも、「命令者が何らかの（事象の方を）向く状態によって直接知覚を持つのと全く同様の（状態）が命令のことばに基づいて生じることはないのではないか、その場合、どうしてその直接知覚を求める者はその（命令）に際して行為するだろうか」、と考えるならば、「向いているの」と。「命令者である私が何らかの仕方（事象の方を）向いているのと同様に、あなたもまったく同じ仕方と同様に（向き）うる」と了解されるべき命令のことばの結果が（事象の方を）向いた状態である、と含意に基づいて教示されているのである。そうでなければ、（ことばを）直接知覚の原因と認めることはあり得ないからである。すなわち、直接知覚の原因であるとの立場に立てば、これ（＝ことば）は推理である、という趣旨である。]*

³⁹ チベット訳による。ヤマーリは次註のように「諸原因」を「ことば」と解釈する。

⁴⁰ Cf. *'jug sdud pa ni des (D : de P) na zhes bya ba'o // de lta zhes bya ba ni brjod zin pa'i tshul du'o // mngon du phyogs par gyur pa la zhes bya ba 'di ni thun mong pa ste mngon sum skyed pa nyid la ni ma yin no // rgyu rnam kyī zhes bya ba ni tshig mams kyī'o zhes de lta dran pa'i skyes bu'i (em. : bu ni PD) nges par sbyor bar bya ba ni mngon du phyogs pa la 'jug (em. : 'dug PD) pa zhes sbyar ro // rgyu de'i phyir na nges par sbyor ba'i tshig ni rjes su dpag pa nyid yin te / tshul gsum pa'i rtags gsal bar byed pas na rjes su dpag pa'i rgyu yin pa'i phyir ro // Y 5b3ff. [= 「従って」と結論する。「（教示する者と）同じように」とは、上述のようなあり方で、である。「（事象の方を）向く場合には」という、このことは（命令のことばが推理を生ぜしめる場合にも）共通であって、直接知覚を生ぜしめる場合のみではない、「諸原因の」、つまり諸々のことばの（作用がある）と、そのように想起しつつ、命令される人は（事象の方を）向こうと行為する、という文脈である。以上の理由により、命令のことばは推理に他ならない。三条件を備えた論証証を説明する手段として、推理の原因であるからである。]*

⁴¹ Cf. *gang gi phyir de lta yin pa des na rjes su dpag pas te / de la mngon du phyogs pa'i mtshan nyid kyī rtags kyīs mngon sum srid par bltas te / nges par sbyor ba'i tshig las mngon du phyogs pa la 'jug pa yin no zhes rtogs par byu'o // Y 5b6f. [= すなわち、「それゆえ」つまり、こうして、「推理に基づいて」つまり、その（事象の）方々を向くことを特質とす*

(反論⁴²;) そうすると、その場合には、(命令者の) 直接知覚の対象領域に関して機能する限り、蓋然性の推理は(三条件を備えた) 自性因である⁴³。(他方⁴⁴) 所作因は、ことばに基づかずに直接的に明らかにされる⁴⁵。すなわち⁴⁶、

「煙あるがゆえに、ここに火がある、という場合に⁴⁷、ことばによって明らかにされるのは結合関係だけで、煙は直接知覚によって明らかにされる。」(5)

従って⁴⁸、「他者のための推理とは、三条件を備えた論証因の陳述である」という『プラマーナ・サムッチャヤ註』は(ダルマキールティの論証因の学説と) 矛盾する。

(回答⁴⁹;) それは妥当でない。なぜならば

「全てのことばは想起のためにある。従って、それ(=結合関係を陳述することば) に関しては、言語表現は認識根拠であるが、他方、直接知覚によって認識された(事象) に関しては、ことばは常に無意味である。⁵⁰」(6)

る論証因によって、「直接知覚の蓋然性を思索した上で命令のことばに基づいて(事象の方を) 向こうと行為するのである」と了解すべきである。]

⁴² Cf. *de lta na 'o na zhes bya ba la sogs pa ni gzhan gyi'o* //Y 5b7.

⁴³ チベット訳は、「(命令される者によって) 直接知覚されない(命令者の) 対象領域に関して…」と解釈すれば充分理解可能であり、むしろ文脈上より良いかもしれない。しかしここでは次註のヤマーリ註に合致する梵文の読みを採用する。

⁴⁴ チベット訳を参考にした。

⁴⁵ Cf. *'o na ni bshad zin pa'i tshul gyis nges par sbyor ba po'i(D : po P) mngon sum gyi yul la | nges pa sbyor ba'i tshig las | gang zhiq don gang la mngon du phyogs par gyur pa zhes bya ba la sogs pa srid pa'i rjes su dpag pa ste rtags 'jug pa ste gsal ba na rang bzhiñ gyi rtags tshul gsum yin pa'o || de ltar 'gyur mod ci skyon snyam na tshig gis (em. : gi PD) 'bras bu'i gtan tshigs tshul gsum pa ni gsal ba ma yin no || khyab pa nyid tshig gis bstan pa'i phyir ro || gang gi phyir phyogs kyi chos nyid ni dngos su grub pa kho na yin pas de la ni tshig dgos pa med pa'i phyir ro* //Y 5b7ff. [= その場合には、上述のようなあり方で命令者の直接知覚の対象領域に関して命令のことばに基づいて、「或る人が或る事象に対面し得る」等の「蓋然性の推理が」つまり論証因が「機能する」つまり説明される限り、(それは) 三条件を備えた自性因である。そうであるとして一体どんな誤りがあるのか、と考えるならば、なぜなら「ことばによっては」三条件を備えた「所作因は明らかにされない」からである。漏れだけが、ことばによって説明されるからである。なぜならば、(所作因の) 主題所属性は直接的に明証されるものに他ならないので、それに関しては、ことばは必要ないからである。]

⁴⁶ Cf. *de nyid ston pa ni 'di ltar zhes bya ba la sogs pa'o | des na 'bras bu'i rtags brjod pa'i gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa (D : pas P) ma yin par 'gyur te | tshul gnyis pa'i rtags brjod pa'i phyir ro zhes bsams pa'o* //Y 6a2f. [= 正にこのことを示して、「すなわち」云々。従って、所作因の陳述は他者のための推理ではないことになってしまう。二条件を備えた論証因を陳述するのだから、と考えるのである。]

⁴⁷ Cf. *tshig las ci'i phyir ma yin zhe na | du ba las 'dār yang zhes bya ba'o* //J 261b6. [= どうして、ことばに基づかないのか、といえは、「煙に基づいて、ここにも」と。] ジャヤンタの *prūṭika* は **api* を含む。古い異説を伝えるものかも知れないが、韻律上の理由から適当な梵文を想定しづらい悩みがある。

⁴⁸ Cf. *'on te tshul gnyis ston par byed pa'i brjod pa yang gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa yin no snyam na | des na gzhan gyi zhes bya ba'o* //Y 6a3. [= もしも二条件を説明する陳述もまた他者のための推理である、と考えるならば、「従って、他者の」と。]

⁴⁹ Cf. *de ni zhes bya ba la sogs pa ni lan no* //Y 6a3.

⁵⁰ Cf. *de la zhes bya ba ni dran par bya ba'am dran pa la brjod kyi bya ba ni tshig tu'o || don med do zhes bya ba ni ma rtogs pa'i don rtogs par byed pas te rgal ba po yin pa'i phyir ro* //J 261b7. [= 「それに関しては」とは、想起されるもの或いは想起における陳述の機能を有することばに関しては、である。「無意味である」とは、未だに認識されていない事象を認識せしめる者として、論者が存在するのだから。]; *des na zhes bya ba ni bzung ba brjod pa'i 'brel pa dran pa'i don du yin pa'i phyir ro || de la ni 'brel pa brjod pa'i tshig la'o || tshad brjod ces bya ba ni gzhan gyi don gyi rjes su*

次のように言われている－「すなわち、賢者たちに対しては、論証因だけが陳述されるべき唯一のものである」(PV 127c'd)⁵¹。同じように、束縛関係もまた(陳述されるべき)唯一のものである、ということも認められて然るべきである⁵²。

あるいはまた⁵³、たとえその(煙が教示される者に直接知覚されている)場合でも⁵⁴、(その煙が)錯覚であることを否定するために、「これは煙である」という他者(=教示する者)のことばが必要とされる場合もある。すなわち、

「ここで私(=教示する者)に認識をもたらしているこれは確かに煙である⁵⁵。何ゆえ、この場合にさえ⁵⁶、あなた(=教示される者)にとって(煙が)錯覚であろうか。(と⁵⁷)。このように(教示される者は自ら直接知覚している煙が錯覚でないことを)他者(=教示する者)によって納得させられる。」(7)

dpag pa'i tshig go // mngon sum gyi don la ci ste ma yin zhe na | mngon sum gyis ni zhes gsungs so // Y 6a3ff. [= 「従って」とは、既に把握された(事象)を陳述するのは結合関係を「想起させるため」であるから、である。「それに関して」とは、結合関係を陳述することばに関して、である。「言語表現は」すなわち他者のための推理のことばは「認識根拠である」。もしも、直接知覚された事象に関してはそうではない、といえ、「直接知覚によって」と言う。]

⁵¹ Cf. *gal te tshad mas rtogs pa la tshig don med par mam 'grel mdzad pas brjod dam zhe na | mkhas pa rnamis la ni zhes bya ba'o // Y 6a5.* [= もしも、認識根拠によって認識された(事象)に関してはことばは無意味であると、ヴァールツェイカ作者(=ダルマキールティ)によって言われているのか、といえ、「すなわち、賢者たちに対しては」と。]

⁵² Cf. *gal te 'di ci ltar shes par byed pa (D : byed pa lacks P) yin te | gang gi phyir 'dir khyab pa grub pa'i phyir de brjod pa ni ma yin gyi | ma grub pa'i phyir gtan tshigs 'ba' zhis brjod par bya ba yin no zhes bya ba'i don rtogs pa'i phyir ro (D : ro lacks P) zhe na | de bzhin du zhes bya ba ste | 'di ni nye bar mtshon pa tsam du zad de 'di ltar yang bla bar bya ba yin no zhes bya ba'i don te // Y 6a5ff.* [= (反論：)この(偈)がどうして(束縛関係だけを陳述すればよいことを正当化する)間接規則(*jñāpaka)であるのか。なぜならば、この(偈)においては「遍充は既に成立しているのであるから、それを陳述する(必要は)ないが、(論証因は)未成立であるから、論証因が陳述されるべき唯一のものである」という意味内容が了解されるからである。(回答：)「同じように」と。すなわち、この(偈)は提喻(*upalakṣaṇa)(=一部で全体を代表させる修辭法)に過ぎないのであり、同様に(他のもの)も(陳述されるべき唯一のものとして)認められて然るべきである、という意味である。]ここで引用されているPVの偈に対するマノーラタナンティンの解釈を見ると(c.f. PVV 297,14f.: *ye tu pratibandhaṃ vidanti teṣāṃ viduṣāṃ hetur ova kevalo vācyaḥ, na dṛṣṭāntaḥ, tatra darśanīyasya pratibandhasya siddhatvāt.* [= およそ束縛関係を知っている者たち、彼ら賢者たちにとっては、論証因だけが陳述されるべき唯一のものであって、 喩例は(陳述されるべきで)ない。なぜならば、その場合には示されるべき束縛関係は既に成立しているからである。]), ヤマーリの註釈における反論者の解釈が、このダルマキールティの偈に対する一般的な解釈であることがわかる。

⁵³ Cf. *'dis ni rtogs pa po ma rmongs pa'i dbang du byas nas phyogs kyi chos la sogs pa mams las tshul gcig grub pa na tshul gnyis ston pa yang gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa yin no zhes pa (D : zhes pa lacks P) bstan to // de rtogs pa yung skabs la sogs pa las rtogs par 'gyur ro / rtogs pa po rmongs pa'i dbang du byas (D : dbang dus P) nas ni tshul gsum pa'i rtags ston pa gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa yin no zhes brjod pa ni yang na zhes bya ba'o // Y 6a7ff.* [= 以上によって、愚鈍でない了解者(=教示される者)に対しては、主題所属性等の中から一つの条件(=主題所属性)が既に成立している場合に、二つの条件(=肯定的随伴性と否定的随伴性)を示すこともまた、他者のための推理である、ということが示されたのである。そして、(了解者に)それ(=主題所属性)が既に認識されていることは、文脈等から知られる。他方、愚鈍な了解者に対しては、三条件を備えた論証因を明らかにすることが他者のための推理である、というのが、「あるいはまた」である。]

⁵⁴ Cf. *der yang zhes mngon sum du mthong ba'i du ba la 'ang ngo // Y 6b1.*

⁵⁵ Cf. *rtogs pa byung ba ni rtogs par gyur pa'o // J 261b7f.* [= 「認識をもたらしている」とは認識されることである。]

⁵⁶ すなわち、私(=教示する者)が「これ」を確かに煙と認識している場合にさえ。

⁵⁷ チベット訳を参考に補った。

(「これは煙である」という)ことばの意義は以下の如くである⁵⁸:そこ(=主題である山)において直接知覚によって認識された事象(=煙等の個物)が他者に対してことばによって知らしめられるのではなく、むしろそれ(=ことば)は他者のための「推理」に他ならないのである。(ことばは)それ(=推理)の原因であるのだから⁵⁹。これは煙に他ならず⁶⁰、それ以外のものには見えない。これは⁶¹、およそ以前に知覚された煙以外のあり方では存在しない。「なぜならそれ(煙)の特徴をもっているから」という(論証因)は言外に(sāmarthyā)述べられている⁶²。従って⁶³、語によって知らしめられるのは、推理という事態に他ならない。語は直接知覚された(事象)に関しては決して機能しないが、他方で推理は極限の反復経験(atyantābhyāsa)に基づくから虚構ではない、というわけで世間(の人々)には異なって見えるのである⁶⁴。以上から、ことばは推理の原因という性質だけを所有するに過ぎない⁶⁵。

⁵⁸ Cf. *don ni 'di yin te zhes bya ba ni tshig las de dang 'dra ba nyid kyi rjes su dpag pa ni mngon sum la yang yin no zhes bya ba 'i don to //* J 261b8. [= 「意義は以下のごとくである」とは、ことばに基づいて、それと全く同様な推理が、直接知覚された(事象)に関しても存在する、という意味である。] ; *gal te mngon sum du grub pa la tshig dgos pa ci yod snyum na / tshig gi don ni zhes gsungs so // 'di du ba'o zhes bya ba 'i tshig gi don te dgos pa ni 'di yin te zhes bya ba 'chad par 'gyur ba 'i mtshan nyid de tshul gsum pa 'i rtags gsal ba'o // mngon sum gyis grub pa ston pa ni tshig gi dgos pa ma yin no zhes bya ba 'i don no //* Y 6b1ff. [= もしも、直接知覚されたものとして既に成立しているものに関してことばがなぜ必要なのか、と考えるならば、「ことばの意義は」と言う。「これは煙である」ということばの意義、すなわち目的は以下の如くである、つまり、以下に説明する特質、すなわち三条件を備えた論証因を説明することである。直接知覚によって既に証明されている(事象)を教示することがことばの目的ではない、という意味である。]

⁵⁹ Cf. *de nyid brjod pa ni (D : ni P) de la zhes bya ba ste sa phyogs su'o // mngon sum gyis mthong ba'i don te rang gi mtshan nyid do // de ni zhes bya ba tshig ni gzhan gyi don gyi rjes su dpog pa yin gyi / gzhan gyi don gyi mngon sum ni ma yin no zhes bya ba 'i don te / de 'i rgyu yin pa 'i phyir ro zhes bya ba ni rjes su dpag pa 'i rgyu yin pa 'i phyir ro //* Y 6b1ff. [= 正にこのことを言うのが、「そこにおいて」、すなわち、(ある)場所において、である。「直接知覚によって認識された事象」とは、個物である。「それは」、すなわち、ことばは、他者のための推理であるが、他者のための直接知覚ではない、という意味である。「その原因であるのだから」とは、推理の原因であるから、である。]

⁶⁰ Cf. *tshig 'di ci ltar de 'i rang bzhin can gyi rang bzhin gyi tshul gsum pa 'i rtags ston par byed pa 'i phyir rjes su dpag pa yin pa de de ston pa ni / 'di ni du ba nyid de zhes bya ba'o //* Y 6b4f. [= このことばは、ちょうど、その本性を有するもの(=「これ」という個物)の本性(=煙)を、三条件を備えた論証因を説明する手段に基づいて推理するものであるが、その(三条件の)各々(=肯定的随伴性・否定的随伴性・主題所属性)を示して、「これは煙に他ならず」と。] つまり、「これは煙である」ということばは、教示される者が直接知覚しているものが煙であることを確証させる推理を惹起する。以下、1) その論証因と煙一般の肯定的随伴性と否定的随伴性は、教示される者が過去の経験に基づいて「これは煙である」という教示する者のことばに同意することによって直接的に成立すること、2) 論証因「煙の特徴をもつこと」の主題所属性は教示する者のことばへの同意から言外に知られること、が説明される。

⁶¹ Cf. *gal te de lta (P : ltar D) na yang tshul gsum pa 'i rtags ston par byed pa ci ltar yin te / 'brel pa ma brjod pa 'i phyir ro zhe na / 'di (P : de D) ni zhes bya ba smos so //* Y 6b5f. [= もしも、たどえそうであっても、どうして三条件を備えた論証因を説明する手段であるのか、結合関係を陳述しないからである、といえ、これは「これは」と言う。]

⁶² Cf. *yang ci ltar nam pa gzhan du gyur (D : sgyur P) pa ma yin zhe na / de 'i zhes smos te / sngar dmigs pa 'i du ba dang rang bzhin mtshungs pa yin pa 'i phyir ro //* Y 6b6. [= さらにまた、どうして別のあり方では存在しないのか、といえ、これは「それは」と言う。以前に知覚された煙との本性上の共通点が存在するからである。]

⁶³ Cf. *gal te don 'di tshig gi dgos su bstan to zhes 'jig rten tha snyad byed pa ma yin nam / des na ci ltar de 'i tshig mngon sum gyi rgyu ma yin zhe na / dgos pa bzlog pa 'i don du brjod pa ni des na zhes bya ba'o //* Y 6b6f. [= 「この事象はことばによって直接的に教示されている」と世間では言語表現するのではないか、従って、どうして彼(=教示する者)のことばが直接知覚の原因でないのか、といえ、疑問を否定するために「従って」と言う。]

⁶⁴ Cf. *gzhan du zhes bya ba ni 'di du ba'o zhes brjod pas (D : pa se? P) mngon sum du mthong ba bstan par ro //* Y 6b7f. [= 「異なって」とは、「これは煙である」という陳述が直接知覚として認識された(事象)を教示するものとして、である。]

(反論;) その場合に、「ここに煙がある」ということばは、それ(=推理)の原因であるがゆえに、自性を推理するものに他ならないのであって、原因を推理するものではない。ことばは自性を推理するものだからである⁶⁶。

(回答;) それは正しくない⁶⁷。

「なぜなら、自己のための推理の際にもまた、煙の色・形に関して、自性因が(所作因の推理の)途中に入り込んでいる(*patita*)。その場合にもまた、考察者にとつては、自性因なくして錯覚の排除はない。⁶⁸」(7a)

(反論⁶⁹;) これに関して述べた。

⁶⁵ すなわち、ことばは、推理の原因となることはできるが、直接知覚された事象を知らしめることはできない、という意味である。

⁶⁶ Cf. 'o na tshig ni zhes bya ba la sogs pa ni gzhan gyi'o // gal te mngon sum la sgra'i byed pa med na tshig ni zhes sbyur ro // ci'i phyir zhe na / de'i zhes bya ba rang bzhin rjes su dpog pa'i rgyu yin pa'i phyir ro // tshig ni rgyu rjes su dpog pa ni ma yin te zhes 'brel to / rgyu rjes su dpog pa ma yin pa'i tshig de gang zhe na / 'di na du ba yod do zhes bya ba smos so // ci'i phyir zhe na tshig ni zhes gsungs so // Y 6b8f. [= 「その場合に、ことばは」云々は、反論者に属する。もしも、語は直接知覚された(事象)に関しては機能しないならば、「ことばは」と繋がる。なぜかといえば、「その」、つまり自性を推理することの「原因だからである」。「ことばは」「原因を推理するものではない」という文脈である。原因を推理しないことばとは何か、といえば、「ここに煙がある」と言う。なぜかといえば、「ことばは」と言う。] すなわち、もしもことばが推理の原因であるとするならば、ことばに基づいて推理内容を認識する過程は原因に基づいて結果を認識する推理となり、いわゆる結果生起可能性 (*kāryotpādanayogyatā*) を推理する自性因となる、という意味である。その結果、他者のための推理においては、「あの山に火がある。煙があるから。」という推理は、原因を推理する所作因ではないことになってしまう、というのが反論の趣旨である。

⁶⁷ Cf. grub pa'i mthar ni / rang gi don gyi rjes su dpag pa la yang rgyu rjes su dpag pa ni yod pa (P : pa ni D) ma yin no zhes ston pa ni de ni zhes bya ba ste / gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa kho nar rgyu rjes su dpag pa med do zhes bya ba de ni ma yin no // Y 7a1f. [= 究極的な説 (*siddhānta) としては、自己のための推理においても原因を推理することは存在しない、ということを示して、「それは」と。他者のための推理のみにおいて原因を推理することが存在しない、という「その」(反論)は正しくない] のである。]

⁶⁸ Cf. 'bras bu la de'i 'dra ba nyid kyi rjes su dpag pa'i rang bzhin du 'gyur bu ni rang gi don la yang yin te / de nyid dang rjes su 'brel pa ma yin pas rang gi don ma yin par bstun pa ni rang don rjes dpag ces bya ba'o // J 261b8f. [= 所作(因)において、それ(=自性因)と同様の性質が推理の本性になることは、自己のため(の推理)においても存する。その性質を持たないならば自己のため(の推理)ではない、ということを示して、「自己のための推理」と。]; ci'i phyir zhe na / rang don zhes smos te / gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa'i dus 'ba' zhig tu ni ma zad de rang don rjes su dpag pa'i dus su (D : su lacks P) yang bar du rang bzhin gyi gtan tshigs 'jug go // gang du zhe na / du ba'i rang bzhin la ste / de'i du ba ni de'i rang bzhin can gyi rjes su dpag pa'i rang bzhin yin pa'i phyir ro // bar du rang bzhin gyi rtags zhugs pa yin zhe na / der yang zhes smos te du ba'i rang bzhin la yang dpyod pa'o zhes bya ba rjes su dpog pa po rang bzhin rtags te de'i rang bzhin gyi (D : gyi lacks P) rjes su dpag pa med par 'khrul pa ldog pa ma yin no // des na rang don gyi rjes su dpag par yang rgyu rjes su dpag pa med do zhes bya ba'i don to // Y 7a2f. [= なぜかといえば、「自己のための」という。他者のための推理の際だけに限らず、自己のための推理の際にも、途中に自性因が入り込んでいる。何に関してかといえば、煙の色・形に関してである。その(現前の)煙はそれ(=煙一般)の色・形を有している、という推理は自性(因)であるから。もしも途中に自性因が存在するのであるならば、「その場合にもまた」という。煙の色・形に関してもまた、考察者、つまり推理をする者には、自性因つまりその自性の推理なしには錯覚の排除は存在しない。従って、自己のための推理においても原因を推理することは存在しない、という意味である。] すなわち、「私が知覚しているものは煙である。煙の特徴をもっているから」といった自性因の推理が、所作因の推理「ここには火がある。煙があるから」の中の一過程として存在しており、その意味では純粋な所作因は存在しない、という見解である。

⁶⁹ Cf. 'dir smras pa zhes bya ba ni rgal ba'o // J 262a1f.; yang gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa nyid la 'bras bu'i gtan tshigs med do zhes pha rol po ston pa ni / 'dir smras pa zhes bya ba nas / zhe na zhes bya ba'i bar du'o // Y 7a5f. [= また、他者のための推理においてのみ所作因は存在しない、ということを示すのが、「これに関して述べた」から「(他者のための推理は存在しない。)」までである。]

「この場合に一体どんな矛盾があるというのか⁷⁰。所作因は侵害されない。たとえ（自性因の）介在（*vyavadhāna*）があるとしても、それ（＝所作因）が所作因性を捨て去ることはあり得ない⁷¹。」（8）

（つまり⁷²、我々によって）自己のための推理においては所作因が存在しないことはない、という限りのことが言わんと意図されている際に、（自性因の）介在をあげつらうことが何の役に立とうか⁷³。他方、他者のための推理においては、所作因そのものがあり得ない⁷⁴。「煙があるから」ということばは、明らかに自性因において機能するからである。従って、火を推理する場合には⁷⁵、他者のための推理は存在しない。

（回答⁷⁶：）それは正しくない。

「臨機応変に（*yathāsambhavam*）依拠しつつ、（一方で自性因に関して）他者のための（推理）の推理性が、論書作者（＝ディグナーガ）によって説かれたのであるが、それ（＝他者のための推理の推理性）は他方（＝所作因）に関してはあり得な

⁷⁰ Cf. *'dī la zhes bya ba ni de'i rang bzhin gyi rjes su dpag pas bar bcaed pa dang 'bras bu'i gtan tshigs la'o* //Y 7a6f. [＝「この場合に」とは、その自性の推理に介在された所作因の場合に、である。] ; *rang gi don la rang bzhin 'jug kyang 'bras bu nyid nyams pa ma yin no zhes zer ba ni 'gal ba ci zhiḡ yod ces bya ba'o* //J 262a2. [＝たとえ自己のため（の推理）において自性（因）が入り込んでいるとしても所作（因）性は侵害されない、と言うのが、「如何なる矛盾が存在するのか」である。]

⁷¹ Cf. *ci ste mi nyams snyam na | de ni bar du zhes smos te 'bras bu'i gtan tshigs de ni'o* //Y 7a7. [＝もしも、侵害されない、と考えるならば、「介在が…それが」と言う。所作因たるそれが、である。]

⁷² Cf. *rang gi don gyi zhes bya ba ni 'chad pa'o* //Y 7a7.

⁷³ Cf. *gang du nye bar mkho zhes bya ba ni 'gal ba med do zhes bya ba'i don to // 'dī ltar gal te yang rang gi don gyi rjes su dpag par du ba 'bras bu'i gtan tshigs ma yin (em. : gtan tshigs yin PD) pa de lta na yang 'bras bu'i gtan tshigs su yang 'gyur ba yin no // dang po du ba la la mthong ba ni 'bras bu'i gtan tshigs yin la | de'i rdzas (P : rjes D) la 'khrul pa srid pas de'i rang bzhin gyi rjes su dpag pa byed pa'i dus su ni rang bzhin gyi gtan tshigs yin la | phyis ni rgyu rjes su dpog pa yin no // de la gal te yang de'i rang bzhin gyi rjes su dpag pas bar chod pa de lta na yang 'bras bu'i gtan tshigs nyid ni mri 'gal lo // de lta na rgyu rjes su dpag pa ni 'jug pa kho na'o* //Y 7a7ff. [＝「**なんの役に立とうか**」とは、矛盾は存在しない、という意味である。すなわち、たとえ自己のための推理において煙が所作因でないとしても、そうであっても所作因でもあり得るのである。初めに煙をどこかで見るのが所作因である一方で、その実体（**dravya*）に関しては錯覚があり得るのでその色・形の推理の時点では自性因なのであり、後に原因を推理するのである。その場合に、もしもまた、その色・形の推理による介在があるとしても、たとえそうであっても所作因性には矛盾しないのである。かくして、原因を推理することが機能しないことはないのである。]

⁷⁴ Cf. *gzhan gyi don la ni de nyams pa yin no zhes zer ba ni 'gzhan gyi don gyi (P: gyis D) rjes su dpag par zhes bya ba'o* //J 262a2f. [＝他方、他者のため（の推理）においては、それ（＝所作因）は侵害されるのである、と言うのが、「他者のための推理においては」である。] ; *'o na gzhan gyi don gyi rjes su dpag par yang rgyu rjes su dpag par 'gyur ba kho na'o snyam na | gzhan gyi don gyi rjes su dpag par ni zhes smos so // gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa ni tshig nyid yin la | tshig kyang dngos su rang bzhin gyi gtan tshigs ston par byed pa'i phyir rang bzhin gyi rjes su dpag pa kho na te | des nu (P : ni D) gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa la ni 'bras bu'i gtan tshigs yod pa ma yin no* //Y 7b2ff. [＝その場合に、他者のための推理においても原因を推理することはあり得る、と考えるならば、「**他方、他者のための推理においては**」と言う。他者のための推理はことばに他ならないが、ことばはまた、実際には自性因を明らかにするものであるから、自性因以外のものではない。従って、他者のための推理においては、所作因は存在しないのである。]

⁷⁵ Cf. *des na zhes bya ba ni 'bras bu'i gtan tshigs med pas na | me rjes su dpog pa zhes bya ba ni (D : ba ni lacks P) rgyu bsgrub par bya ba la'o* //Y 7b4f. [＝「従って」すなわち、所作因は存在しないので、「**火を推理する場合には**」すなわち、原因が論証対象である場合には、である。]

⁷⁶ Cf. *lan ni de ni ma yin te zhes bya ba'o* //Y 7b5.

い。いかなる過失があろうか。⁷⁷⁾ (9)

あるいはむしろ、錯覚がない場合には、自己のための推理において、所作因は（自性因によって）全く介在されない⁷⁸⁾。他者のための推理においても、他ならぬその状態があるので、語に基づいて全く直接的に推理が生起する⁷⁹⁾。

(反論：) 錯覚がない場合には、ことばは何のためにあるのか⁸⁰⁾。

(回答⁸¹⁾：) 束縛関係（＝遍充関係）を示すためであるから誤りはないが、三条件を備えた論証因の陳述は全く臨機応変である、と先程説明されたばかりである⁸²⁾。

⁷⁷⁾ Cf. *ji ltar srid pa zhes bya ba ni gzhan gyi don du rang bzhin kho na yin pa'o // gzhan la zhes bya ba ni 'bras bu la'o // J 262a3. [= 「臨機応変に」というのは、他者のため（の推理）においては自性（因）のみがあるのである。「他方に関しては」とは、所作（因）に関しては、である。] ; ji (D : ci P) ltar srid pa'i zhes bya ba 'di ni du ba yin no zhes bya ba'i tshig ni rang bzhin la brten nas gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa nyid yin gyi | 'bras bu la brten nas ni ma yin na'o // gzhan la zhes bya ba rgyu la gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa nyid de med de | bstan bcos las ni rang bzhin la brten nas gzhan gyi don gyi rjes su dpag par brjod pa yin no zhes bya ba'i don to // Y 7b5f. [= 「臨機応変に」というのは、「煙は存在する」ということばには自性（因）に依拠して他者のための（推理）の推理性があるが、所作（因）に依拠してではないという具合に、である。「他方のものに関しては」すなわち原因にはそれ、すなわち他者のための（推理）の推理性は存在しない。論書に基づいて自性因に依拠して他者のための（推理）が推理として述べられた、という意味である。] なお、偈の中の「論書作者（sāstrakṛtī）」とは、他者のための推理を定義したディグナーガと解すべきであろう。自性因と所作因の区別はダルマキールティの創出であるから、その場合には偈の内容は今日の思想史的観点からすれば時代錯誤的であるが、それはプラジュニャーカラグプタには問題にならない。ダルマキールティ自身 PV の中で、自ら創案した自性因と所作因の区別をディグナーガが予知していたかの如く語る箇所がある (cf. 小野基「ダルマキールティの九句因解釈 —PV IV 195-204—」、『比較思想の途』第 4 号、1985: 81-85)。これらは根本教典の無謬性を前提に論述を進めるインドの学派的伝統のなせる業であると言えよう。*

⁷⁸⁾ Cf. *gang yang 'gal ba ci zhiḡ yod ces bya ba la sogs pa brjod pa de yang rtogs pa po 'khrul pa la bltos pa kho nas 'thad pa yin gyi / rtogs pa po 'khrul pa med pa la bltos nas ni ji (D : ci P) ltar rang gi don gyi rjes su dpag pa la ma chod pa (D : pa lacks P) kho nar 'bras bu'i gtan tshigs yin pa de bzhin du gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa la yang yin no zhes bstan pa'i phyir brjod pa ni yang na zhes bya ba'o // 'bras bu'i gtan tshigs gang du 'khrul pa med pa der ni rang bzhin gyi gtan tshigs kyi chod pa med pa nyid do // Y 7b6ff. [= およそ「一体どんな矛盾があるというのか」等の言、それは、錯覚している了解者に関してのみ妥当であるが、錯覚していない了解者に関しては、ちょうど自己のための推理において（自性因によって）全く介在されることなく所作因が存在するように、他者のための推理においても同様である、ということを示すために、「あるいはむしろ」と言う。ある所作因に関して錯覚が存在しない時、それに関しては自性因によって全く介在されない。]*

⁷⁹⁾ Cf. *tshul de nyid ces bya ba ni rang gi don gyi rjes su dpag pa la brjod pa gang yin pa'o / dgos kho nar zhes bya ba ni phyogs kyi chos nyid brjod pa med par de'i rang bzhin gyi rjes su dpag pa med pas so // sgra las zhes bya ba ni 'brel pa tsam brjod pa las so / rtogs pa po 'khrul pa med pa la bltos nas ni 'brel ba tsam zhiḡ tshig gis brjod kyi phyogs kyi chos nyid ni tshig med par rtogs pa yin no // des na 'dir yang du ba ni ma chod pa kho nar 'bras bu'i rtogs yin no // Y 8a1ff. [= 「他ならぬその状態」とは、自己のための推理に関して言われたところのものである。「全く直接的に」とは、主題所属性を陳述することなく、それ（＝論証因）の色・形の推理なしに、である。「語に基づいて」とは、結合関係のみを陳述することに基づいて、である。錯覚していない了解者に関しては結合関係のみをことばによって陳述するが、他方、主題所属性はことばなしに認識される。従って、この（＝他者のための推理の）場合にも煙は決して（自性因によって）介在されることなく所作因なのである。]*

⁸⁰⁾ Cf. *'di snyam du gal te 'khrul pa nyid med na de brjod pas ci zhiḡ bya snyam pa ston pa ni / 'khrul pa med na zhes bya ba'o // Y 8a3f. [= このようにして、もしも他ならぬ錯覚が存在しないならば、その場合にはことばは何のためにあるのか、という考えを示して、「錯覚がない場合には」と。]*

⁸¹⁾ Cf. *lan ni 'brel pa zhes bya ba'o // Y 8a4.*

⁸²⁾ Cf. *ji ltar srid pa ni gtan tshigs grub pa la 'brel pa'i don du dang / 'di ma grub na gtan tshigs kyi don du dang / gnyi ga ma grub na gnyi ga'i don du'o // J 262a3f. [= 「臨機応変」というのは、論証因が成立している場合（＝主題所属性が成立している場合）には結合関係（＝遍充関係）のために、またこれ（＝論証因）が成立していない場合には論証因のために、また両者（論証因と結合関係）が成立していない場合には両者のために、である。] ; de ltar na 'o na*

さらにまた⁸³、

「(推理の原因として) 生成された推理性なくしては、ことばに認識根拠性は存在しない。正にその限りのことが、(他者のための推理の定義で) 意味されているのであって、ことばが全てそのようなものであるのではない。」⁸⁴ (10)

(反論:) ある者は言う — どうして直接知覚と推理とだけに認識根拠性があるのか。ことばにもまた(認識根拠性がある。なぜならことばは) 日常活動の原因だからである。ことばなしには、世間(の人々)の日常活動は成り立たない⁸⁵。

(回答⁸⁶;) これに対して言う。

「直接知覚と推理とことばとがなくしては世間(の人々)の日常活動は存在しないの

gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa ni tshul gsum pa'i rtags ston pa'o zhes bya ba 'gal to snyam na / tshul gsum pa'i zhes gsungs so // ji (D : ci P) lta' srīd par (D : pa P) zhes bya ba ni 'khrul pa la tshul sum (D : sum lacks P) brjod par bya ba yin gyi ma 'khrul pa la ni ma yin te de'i 'brel pa'i tshig tsam las rtags pa'i phyir ro zhes bya ba'o // Y 8a4f. [= そうすると、その場合には、「他者のための推理は三条件を備えた論証因の陳述である」という(『ブラマーナ・サムッチャヤ註』)は矛盾している、と考えるならば、「三条件を備えた」と言う。「臨機応変」というのは、錯覚がある人に対しては三条件を陳述する必要があるが、錯覚がない人に対してはそうではない、なぜなら後者は結合関係(を陳述する)ことばのみに基づいて(三条件を備えた論証因を)認識するからである、ということである。]

⁸³ Cf. *de lta' na 'di na du ba yod de zhes bya ba'i tshig ni rgyu'i (P : rgyu'i 'bras bu D) rjes su dpag pa ma yin te rang bzhin gyi rjes su dpag pa yin pa'i phyir ro zhes bya ba mam pa gnyi ga lta' yang bsal nas rnam pa gzhan gyis kyang bsal ba'i phyir gzhan yang zhes gsungs so // Y 8a5f. [= こうして、「ここに煙がある」ということばは自性の推理であるから原因の推理ではない、ということをも二種各々のやり方で否定してしまってから、さらに別のやり方で否定するために、「さらにまた」と言う。]*

⁸⁴ Cf. *tshig ni rjes su dpag pa nyid kyis tshad ma nyid yin pas tshad ma yin gyi gzhan du ni ma yin no zhes bya ba'i dbang du byas par 'dir ma yin par bstan pa ni tshig la zhes bya ba ste // J 262a4f. [= ことばは、推理性によって認識根拠性があれば、認識根拠であるが、そうでない場合には(認識根拠では)ない、ということに関して、この場合には(認識根拠では)ない、ということを示して、「ことばに」という。]; *rjes su dpag pa'i rgyus byas pa'i rjes su dpag pa nyid de med par ni tshig la (em. : las PD) tshad ma med kyī 'on kyang tshig ni rjes su dpag pa'i rgyu yin pa nyid kyis tshad ma yin no // des na 'di tsam nyid rang gis mthong don rab gsal byed ces bya ba 'dir mngon par 'dod pa yin gyi / gang gis gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa rgyu'i rjes su dpag pa med pa'i phyir mshan nyid 'di mi 'grig par 'gyur ba / 'di na du ba yod do zhes brjod pa'i tshig mams thams cad ni de lta' te rjes su dpag pa'i rgyur brjod par 'dod pa ma yin no // Y 8a6ff. [= 推理の原因として生成されたその推理性なくしては、ことばに認識根拠性は存在しないのであって、むしろ、ことばは、推理の原因であることによるのみ、認識根拠なのである。従って、正にその限りのことが、「自身によって認識された事象を説明する手段」というこの(定義文)で意味されているのであって、「ここに煙がある」と陳述することばが全てそのようなもの、つまり推理の原因であると言いたいのではないのである。(さもなければ) 他者のための推理では原因の推理が存在しないのだから、この定義は妥当でないものとなってしまう。]**

⁸⁵ Cf. *rjes su dpag pa ma yin pa'i tshig kyang tshad ma yin te / rgol ba bstan pa ni ji skad du zhes bya ba'o // J 262a5. [= 推理でないことばもまた認識根拠である(という)反論を示して、「ある者は」と。]; *'on te yang ci lta' mngon sum dang rjes su dpag pa dag tha snyad kyī (D : kyis P) rgyu yin pa'i phyir tshad ma (em. : rjes su dpag pa PD) yin pa de bzhin du tshig kyang yin gyi / rjes su dpag pa'i rgyu yin pa'i phyir ni ma yin no zhes bya ba'i phyogs sngu ma gzhan gyi kho nas nye bur 'god pa ni // ji (em. : ci PD) skad du zhes bya ba'o // tshig kyang tshad ma yin no zhes 'brel to // ci'i phyir zhe na / tha snyad kyī zhes gsungs so // de (D : 'di P) nyid gsal bar byed pa ni tshig med par ni zhes bya ba'o // rjes su dpag pa'i rgyu las gzhan du yang tshig tshad mar khas blang par bya'o zhes bya ba'i don to // Y 8b1ff. [= あるいはまた、「ちょうど直接知覚と推理とが日常活動の原因であるがゆえに認識根拠であるのと同様に、ことばも(日常活動の原因であるがゆえに認識根拠)なのであって、推理の原因であるがゆえにではない」という前主張を、「ある者は言う」という(具合に)反論者自身が立論する。「ことばにもまた」認識根拠性がある、と繋がる。なぜかといえば、「日常活動の」と言う。他ならぬこのことを示して、「ことばなしには」と。推理の原因とは別のあり方としても、ことばは認識根拠として承認されねばならない、という意味である。]**

⁸⁶ Cf. *sun 'byin pa ni de la bhad pa zhes byu ba'o // Y 8b3.*

か⁸⁷。どうしてそれ(=ことば)にも認識根拠性があるだろうか。」(11)

直接知覚等なしに、以前に明確に認識された事象を想起した後でも、人は行為しないだろうか。その場合には想起もまた認識根拠なのか⁸⁸。もしもそれ(=想起)が(日常活動の原因であるにもかかわらず)決して認識根拠ではないのならば、(日常活動の動機づけという)同様な意味を持つことばも認識根拠ではない、というわけで(想起とことばは)等しいのである⁸⁹。しかし、およそ(ことばが)認識根拠であるのは、(それが)推理の原因である場合に限るのであって、それ以外ではないのである⁹⁰。ここで言われようと意図されているのは、それだけのことであって、全てのことばが全ての推理の原因であるのではない⁹¹。ことばには、上述のような推理性があるが、自律的な(*svātantryeṇa*)認識根拠性はない⁹²。他方、全ての(ことばに)

⁸⁷ Cf. *med par 'gyur ram ci zhes bya ba ni dran nas kyang 'byung bu'i phyir ro* //J 262a5f. [= 「存在しないのか」というのは、想起した後でも生じるからである。]

⁸⁸ Cf. *'di gsum med par yang 'jig rten gyi tha snyad dam ci' 'on kyang dran pa las kyang yod pa kho na'o zhes bya ba'i don to // ci gang 'di tsam gyis dran pa de la tshad ma nyid yin nam ste ma yin pa kho na'o // tha snyad 'jug pa med dam ci zhes sbyar ro* //Y 8b3f. [= この三つがなくても、世間(の人々)の日常活動はあるではないか。むしろ、想起に基づいても(日常活動は)存在することがある、という意味である。どうして、これだけのことによって、その想起に認識根拠性があるのか、決してないのである。「日常活動は存在しないのか」と繋がる。] ヤマーリの *prātika* は若干梵文と異なるが、要するに偈中の c 前半の *vyavahāro 'sti* を ab に繋げて読むべしとの註釈である。

⁸⁹ Cf. *de lta bu'i don can zhes bya ba ni mngon sum la sogs par rtogs pa'i don can no* //J 262a6. [= 「同様な対象を持つ」とは、直接知覚等として認識された対象をもつ、ということである。]; *'on te dran pa de tshad ma ma yin pa nyid na zhes bya ba la tha snyad kyi rgyu yin yang zhes bya ba ni lhaq ma'o // lan ni de lta bu'i zhes bya ba'o // de lta bu'i don can ni tha snyad kyi dgos pa can no // mthungs pa ni dran pa dang tshig go* //Y 8b4f. [= 「もしもそれ、すなわち想起が、決して認識根拠でないのならば」という(文)には、「日常活動の原因であるにもかかわらず」と補足される。答えて、「同様な」と。「同様な意味をもつ」とは、日常活動の動機となる、ということである。「等しい」とは、想起とことばとは、である。] *tathārham* という句に対する二人の註釈者の解釈は明らかに異なるが、ここではヤマーリの解釈に従う。

⁹⁰ Cf. *'o na ci lta r tshul gsum pa ston par byed pa tshad ma yin zhes dogs pa sel bas tshig le'ur byas pa dang po mam par 'grel pa ni | gang du zhes bya ba'o // gzhan du ni ma yin no zhes bya ba ni tha snyad kyi rgyu yin pa nyid kyiis ni* (D : *tha snyad kyi rgyu yin pa nyid kyiis ni lacks P*) *ma yin pa'o* //Y 8b5f. [= その場合に、一体どうして三条件を説明する手段が認識根拠であるのか、という疑問を排除することによって、(『プラマーナ・サムッチャヤ』第三章の) 第1偈を説明するのが、「およそ」である。「それ以外ではない」、つまり、日常活動の原因であるからではない、のである。]

⁹¹ Cf. *gal te tjes su dpag pa thams cad kyi rgyu nyid kyiis tshig tshad ma yin par mtshan nyid du ci ste mi 'dod ce na | 'dir ni 'di tsam zhiq ces gsungs te | rang gis mthong don zhes bya ba la sogs pa'i mtshan nyid kyi ngag 'dir na* (P : ni D) *tjes su dpag pa'i rgyu yin pa nyid kyiis tshig tshad ma yin pa 'di tsam zhiq brjod par 'dod pa yin gyi | gang gis gzhan gyi don gyi* (D : *don gyi lacks P*) *tjes su dpag par rgyu'i tjes su dpag pa'i rgyu nyid ma yin pa'i phyir na mtshan nyid 'di mi 'grig par 'gyur ba tjes su dpag pa thams cad kyi rgyu yin pa nyid kyiis* (em. : *kyi la PD*) *ni ma yin no // 'di nyid brjod pa ni tshig thams cad ces bya ba'o // 'di na du ba yod do zhes brjod pa'i tshig ni rang bzhin rjod par byed pa yin yang tjes su dpag pa thams cad kyi rgyu yin pa'i phyir na rgyu'i tjes* (D : *tjes su P*) *dpag gi rgyur yang 'gyur ba yin no* //Y 8b6f. [= (反論:) ことばは全ての推理の原因であることによって認識根拠である、と定義においてどうして認められないのか。(回答:)「ここでは、それだけのことが」と彼は言う。ここ、すなわち「自身によって認識された」等の定義のことばでは、推理の原因であることによって、ことばが認識根拠であるという、それだけのことが言われようと意図されているのであって、全ての推理の原因であることによるのではない。(さもなければ) 他者のための推理には原因の推理の原因性は存在しないので、この(ディグナーガの) 定義は妥当でないものとなるであろう。正にこのことを説いて、「全てのことばが」と。「ここに煙がある」と陳述することばは、(本来) 自性(**svabhāva*)を陳述するものであるにもかかわらず、全ての推理の原因であることによって、原因の推理の原因にもなって(ディグナーガの定義と矛盾することになって) しまうであろう。]

⁹² Cf. *'o na ci zhiq brjod par 'dod snyam na | brjod zin pa nyid kyi don brtan par byed pa ni tshig gi tjes su dpag pa nyid de zhes bya ba tjes su dpag pa'i rgyu nyid tshad ma yin gyi | tjes su dpag pa'i rgyu ma yin par rang rgyud kyiis ni ma yin no* //Y 9a2f. [= その場合に、何が言われようと意図されているのか、といえは、既に述べられたことの意味を確認す

推理性があると説くのは無意味である⁹³。従って、三条件を備えた論証因を説明することばのみが(推理の原因)である⁹⁴。

(反論⁹⁵):) その場合には、ヴェーダのことばにはどうして認識根拠性があるのか。

(回答:) そこ (=ヴェーダ) においてもまた、「一年には十二の月がある」等(の文言)に関しては、正に直接知覚と推理の対象を説明するがゆえに、認識根拠性があるが、他の(超知覚的なもの)に関しては、人間のことばにおけると同様に(ヴェーダにも)、認識根拠性はない。⁹⁶

(反論:) 他ならぬ非人為性のゆえに、(ヴェーダには超知覚的なものに関する) 認識根拠性がある⁹⁷。

(回答:) 否。信憑性がないからである。すなわち、ことばのみに基づいては誰も信じない⁹⁸。またもしも、ヴェーダは直接知覚と同様である、というならば、どうして万人が了解しないのか⁹⁹。

る。つまり、「ことばには、上述のような推理性がある」すなわち推理の原因としての認識根拠性があるが、推理の原因であることなしに自律的にはないのである。]

⁹³ Cf. *rjes su dpag pa 'i rgyu de ni rang bzhin gyi rtags kyi rgyu nyid kyang nyams pa med do // mtshan nyid kyi tshig la tshig thams cad rjes su dpag pa nyid gang yin pa de ltar bstan pa la ni nye bar mkho ba med do // des na gzhan gyi don gyi rjes su dpag par rgyu 'i rjes su dpag pa mi srid kyang mtshan nyid kyi tshig la gnod pa med do zhes dgongs pa 'o // Y 9a3f. [= 他方、その推理の原因(性)は、自性因の原因性も侵害しない。しかし、定義のことばにおいて全てのことばに推理性があるという風には説くことは無意味である。従って、他者のための推理において原因の推理があり得ないとしても、定義のことばには矛盾はない、という趣旨である。]*

⁹⁴ Cf. *gang gi phyir tshul gsum pa 'i rtags las (em. : la PD) ma gtogs pa gzhan la gsal bar byed pa med pa des na tshul gsum ston pa nyid ji (em. : ci PD) ltar srid par rjes su dpag pa yin no zhes bya ba ni skabs su bab pa yin te / de ni rgyu yin pa 'i phyir dang / 'bras bu yin pa 'i phyir zhes dgongs pa 'o // don gyis (em. : gyi PD) ni grags can gyis yongs su brtags pa 'i rtags ston pa ni rjes su dpag pa ma yin no zhes gnas so // Y 9a4ff. [= 三条件を備えた論証因以外に他者に説明する手段は存在しないのであるから、従って、三条件を説明することだけが、臨機応変に、推理である、というところが眼目である。それは原因であるからであり、また結果であるからである、という趣旨である。他方、言外に、サーンキヤ学派によって想定された論証因を説明することは推理ではない、ということが確立された。]*

⁹⁵ Cf. *rig byed du smra bas rig byed tshad ma ma yin par thal ba mthong nas 'dri ba ni 'o na zhes bya ba 'o // Y 9a6f. [= ヴェーダ論者は、ヴェーダが認識根拠ではないことが帰結してしまうと見て、「その場合には」と反論する。]*

⁹⁶ Cf. *lan ni der yang zhes bya ba ste / tshul gsum pa ston par byed pa 'ba' zhi tu ni ma zad de rig byed la yang ngo // mngon sum gyi don ston pa ni lhug par zhes pas so // gzhan du ni zhes bya ba mtho ris la sogs pa shin tu dbang po las 'das pur ro // Y 9a7f. [= 答えて、「そこにおいてもまた」と、三条件を説明する手段(としてのことば)だけに限らず、ヴェーダにおいてもまた、である。直接知覚の対象を説明することは、確定知 (**adhyavasāya*) によるのである。「他に関しては」とは、天界などの超知覚的なものに関しては、である。]*

⁹⁷ Cf. *dogs pa bsu (D : bsdu P) bu ni skyes pas ma byas pa nyid kyi dbang po las 'das pa 'i don la rig byed tshad ma yin no zhe na // Y 9a8. [= 他ならぬ非人為性のゆえに、超知覚的な対象に関してヴェーダは認識根拠である、と疑問を呈するならば、]*

⁹⁸ Cf. *ma yin te zhes 'gog pa 'o // ci 'i phyir zhe na / yid ches pa med pa 'i phyir ro // tshad ma ni nges par byed pa yin na / dbang po las 'das pa 'i don ni rig byed las nges pa ma yin no // Y 9a8f. [= 「否」と否定する。なぜかといえば、信憑性がないからである。すなわち、認識根拠とは確定手段であるが、超知覚的な対象はヴェーダに基づいて確定されないのである。]*

⁹⁹ Cf. *mngon sum ltar zhes bya ba ni rig byed kyi tshig las mngon sum gyi shes pa yin no zhes zer bas so // J 262a6f. [= 「直接知覚と同様である」というのは、ヴェーダのことばに基づいて、直接知覚されるものの認識がある、と言われているので、である。]; 'on te dbang po las 'das pa 'i don la rig byed nges par byed pa yin te / mngon sum bzhia no snyam na / gal te zhes bya ba 'o // ci ste rig byed las dbang po las 'das pa 'i don thams cad mi rtags pa zhes bya ba ni skabs te*

(反論:) 刹那滅性等の推理に基づいても、万人が了解するわけではない。もしも(それは)錯覚の所為だ、というならば、それ(=ヴェーダ)に関しても錯覚はある¹⁰⁰。

(回答:) 推理においては、信憑性に裏打ちされた同類の推理に基づいて(錯覚は)排除されるが、他方ヴェーダにおいては、同類のことばによっては(排除され)ない、というわけで、この(両者)は同等ではないのである¹⁰¹。

「肯定的随伴性によって束縛されている場合には推理には認識根拠性があるが、ヴェーダに肯定的随伴性は見られない¹⁰²、ということは以前に吟味された¹⁰³。」(12)

[brda la bltos pas ci zhis bya ste / mngon sum ni brda la bltos nas don ston par byed pa ma yin pa de bzhin du rig byed kyang gyur ro // Y 9b1ff. [= もしも、超知覚的な対象に関してはヴェーダが確定手段である。直接知覚と同様である、と考えるならば、「もしも」と。どうしてヴェーダに基づいて超知覚的な対象を万人が了解しないのか、という趣旨は(以下の如くである)。言語協約(*sapketa)に基づくことが何の役に立とうか。直接知覚は言語協約に基づいて対象を明らかにするものではないと同様に、ヴェーダもまた(そのようなもの)になってしまおうだろう。]

¹⁰⁰ Cf. pha rol pos skad cig ma zhes smras te / sogs pa'i sgras bdag med pa la sogs pa bsdu ba'o (P : bsdu'o D) // pha rol po nyid sangs rgyas pa'i dogs pa bsu (D : bsdu P) ba ni 'khrul pas so zhes bya ba (P : ba lacks D) ste / skad cig ma nyid la sogs pa'i (em.: pas PD) rjes su dpag pas rtogs pa ma yin no snyam na / de nyid brjod pa ni / 'dir yang zhes bya ba ste rig byed la'o // 'dis ni skad cig ma nyid rjes su dpag pa dang rig byed dag mshungs pa nyid du bstan to // Y 9b3ff. [= 反論者は、「刹那滅」という。「等」という語によって、無我等が包括される。反論者自身が仏教徒の疑問を呈して、「錯覚の所為だ」というのである。(錯覚の所為で)刹那滅性等の推理によっては人は了解しない、と考えるならば、正にそれを言って、「それに関しても」すなわち、ヴェーダに関しても、である。以上によって、刹那滅性の推理とヴェーダとが等しいものとして説かれるのである。]

¹⁰¹ Cf. lan ni rjes su dpag pa la (em. : la lacks PD) zhes bya ba'o // yod pa nyid ni chos can sgru la sogs pa la skad cig ma nyid la sogs pa sgrub par byed pa yin la / de yang de'i rigs can gyi bum pa la sogs pa'i dpe la skad cig ma nyid dang lhan cig 'brel pa sgrub pa'i rjes su dpag pa zhugs pa yin no // de nyid kyang yod pa nyid ni skad cig ma med par mi 'gyur ro zhes nges shing yid ches pa'i gnas te rten yin no // des ni rjes su dpag pa la ni zhes bya ba skad cig ma nyid sgrub par byed pa'i rtags la (D : la lacks P) res ga' 'ga' zhis tu skad cig ma nyid med kyang yod par 'gyur srid do snyam pa'i 'khrul pa bzlog pa yin te / des na yod pa las skad cig ma nyid rjes su dpag pa ni tshad ma yin no // rig byed lu yang de ltar 'gyur ro zhe na / rig byed la ni zhes gsungs te me'i sbyin sreg la sogs pa'i ngag las so // de'i rigs can gyi tshig gis 'khrul pa bzlog pa ma yin no // rig byed dang rigs geig pa'i tshig ni bden (D : gdeg P) pa'i don can du sgrub par byed pa yin la 'di la ni bzlog pa lu ni gnod pa'i tshad ma ci yang med do // des na des rig byed la 'khrul pa bzlog pa ma yin te ma nges pa'i phyr ro / de bas na 'di gnyis ni mi mshungs so // Y 9b5ff. [= 答えて、「推理においては」と。存在性(という論証因)が主題である語等における刹那滅性等を論証するが、その(存在性)がまた、「同類の」壺等の喩例において刹那滅性と結びついていることを証明する「推理」が働くのである。他ならぬその(推理)も、存在性は刹那滅性がなければあり得ない、という確定、つまり信憑性に裏打ちされて、つまり依拠しているのである。従って、推理においては、というのは、刹那滅性を論証する論証因においては、何らかの刹那滅ならざるものもまた存在することがあり得る、と考える錯覚は排除されるのである。従って、存在(性)に基づく刹那滅性の推理は認識根拠である。ヴェーダにおいても事情は同じであろう、というならば、「他方ヴェーダにおいては」と言う。アグニ・ホートラ等の文章に基づくのである。同類のことばによっては錯覚は排除されないのである。すなわち、ヴェーダと同類のことばを、真なる対象を持つもの(=真実対象性 *satyārthatva)として論証するのだが、この場合には逆命題を拒斥する認識根拠(*viparyayabādhakapramāṇa)は全く存在しないのである。従って、それ(=真実対象性)はヴェーダにおいて錯覚を排除するものではない。不確定だからである。以上から、この両者は同等ではないのである。]

¹⁰² Cf. rjes su dpag pa yid ches pa'i gnas ji ltar yin zhe na / 'brel pa'i phyr ro zhes bstan pa pa ni rjes su 'gro dang zhes bya ba'o // J 262a7. [= 推理が信憑性に裏打ちされているのはどうしてか、というならば、結合関係があるからである、ということを示して、「肯定的随伴性によって」と。]; mi mshungs pa nyid ston pa ni rjes su 'gro dang ni zhes bya ba'o // 'dis rjes su 'gro bas na rjes su 'gro ni rgyus te bsgrub par bya ba dang 'brel pa'i rtags so // des na 'brel pa yin pas na rjes su dpag pa tshad ma nyid yin gyi / gzhan du ni ma yin no // bsgrub par bya ba dang 'brel pa yang tshad ma las nges pa kha na'o // rig byed la ni don dang lhan cig 'brel pa mthong ba med do // Y 10a2f. [= 同等ではないということを示すために、「肯定的随伴性によって」と。この肯定的随伴性によって、つまり肯定的随伴性という原因によって論

あるいはむしろ¹⁰⁴、次のような意味である。三条件を備えた論証因を陳述するという特徴をもったことばのみが他者のための推理であり、ヴェーダのことばはそうではない。それ(=ヴェーダ¹⁰⁵)は三条件を欠いているからである。なぜならば、それ(=ヴェーダ)には真実性と肯定的随伴性は見られないし¹⁰⁶、主題所属性(も)ない¹⁰⁷。すなわち、非人為性によって非真実性からは排除されているが、真実性と肯定的随伴性は存在しない¹⁰⁸。

(反論¹⁰⁹：)「(一年には)十二の月がある」というのが肯定的随伴性である。

(回答¹¹⁰：)これに対して言う。

「アグニ・ホートラ等の文章がヴェーダであることは、確証されてはいない¹¹¹。そ

証因は論証対象に束縛されているのである。従って、束縛されている場合には推理には認識根拠性があるのだが、そうでない場合には、(認識根拠性)はないのである。そして、論証対象との束縛関係は認識根拠に基づいて必ず確定されるが、他方、ヴェーダに対象との束縛関係は見られない。]

¹⁰⁴ Cf. *sagar zhes bya ba ni stong phrag phyce dang bzhi par ro* //Y 10a4. [=「以前に」とは『3500よりなるもの』においてである。] ヤマールがここで言及する『3500よりなるもの(**udhyuṣṭasahasrikā*)』とは、Pramāṇavārtikasvayptiを指すと考えられる。後代のチベットでは同書はしばしば『3500シュローカ量の論書』と呼ばれている (cf. D. Jackson: *The Entrance Gate for the Wise (Section III)*, Wien 1987, Vol.1.: 113; 西岡祖秀『『プトゥン(仏教史)目録部索引』I』、『東京大学文学部文化交流施設研究紀要』第5巻、1981:67;(1010) *nam 'grel le'u dang po'i nang 'grel 3500 (shl.) dang*; なお西岡論文に関しては野武美弥子氏から資料提供を受けた)。また同書の後半が詳細なヴェーダの非人為性批判を内容とすることは言を俟たず、ヴェーダのことばには真実対象性 (*satyārthatva*) との肯定的随伴性はないという趣旨の言明は、同書中に枚挙に暇がない (cf. PVSV 112,6-155,18 ad PV [224-291])。なおヤマールは、以前にも一度、ブラジュニャーカラグプタがヴェーダ批判を行う文脈で、この書名に言及している (cf. Y[Be]168b6)。因みに、この書名がクマールラの *Ślokavārtika* を指す場合もあることは注目に値する (cf. RNA 42,19; 稲見正浩氏のご教示による)。

¹⁰⁵ Cf. *rjes su dpag pa bzhi du rig byed kyang 'gyur ro zhes zer ba la / yang na zhes bya ba'o* //J 262a7f. [= 推理と同様にヴェーダもまた(認識根拠で)あり得る、と言うのに対して、「あるいはむしろ」と。] *'di ni phyogs kyi chos nyid khas blangs nas brjod pa yin no // du (em. : de PD) ni de yang yod pa mu yin zhing / skeyes bus ma byas pa lu yang ldog pa tsam gyis ni go bar byed pa nyid ma yin no zhes bstan pa'i don du yang na zhes gsungs so* //Y 10a4f. [= 以上は、主題所属性を仮に認めた上で言われたのである。次に、それ(=主題所属性)も存在せず、さらに非人為性(という論証因)に関しても否定的随伴性のみによっては知らしめる性質(=論証因性;**gamakatva*)は存在しない、ということを示すために、「あるいはむしろ」と言う。] すなわち、主題所属性を仮に認めた第12偈の批判について、以下に、主題所属性をも承認しない今一つの批判が展開される。

¹⁰⁶ Cf. *de la ni rig byed la'o* //Y 10a5.

¹⁰⁷ Cf. *'di ga las she m / de la ni zhes bya ba ste rig byed la'o* //Y 10a5.

¹⁰⁸ Cf. *phyogs kyi chos zhes bya ba dbang po lus 'das pa'i don gyi chos can gyi chos med pa nyid do // skeyes bu'i chos nyid du rtags pa'i phyir ro* //Y 10a5f. [= 「主題所属性」とは、超知覚的な対象としての主題(**dharmin*)の属性は決して存在しない。人間には、ただの属性として認識されるからである。]

¹⁰⁹ Cf. *ci ltar bden pa'i don nyid rjes su 'gro ba med snyum na / 'di ltar zhes gsungs so // ldog pa ni rig byed kyi tshig go // rjes su 'gro ba med pa ni mthun pa'i phyogs med pa'i phyir ro* //Y 10a6f. [= どうして真実対象性との肯定的随伴性が存在しないのか、と考えるならば、「すなわち」と、「排除されている」とは、ヴェーダのことばが、である。肯定的随伴性が存在しないのは、同類例が存在しないからである。]

¹¹⁰ Cf. *rjes su 'gro ba khas blangs kyang mngon par 'dod pa 'grab pa ni ma yin no zhes bstan pa'i phyir dogs pa bsu ba ni / ci ste zhes bya ba'o* //Y 10a7. [= 肯定的随伴性を仮に認めたとしても、意図されている(論証対象の)論証は存在しない、ということを示すために疑問を呈して、「もしも」と。]

¹¹¹ Cf. *lan ni 'di la brjod pa zhes bya ba'o* //Y 10a7.

¹¹² Cf. *yang na zla ba bu gnyis lo yin no zhes bya ba 'dir bden pa nyid dang rjes su 'gro ba yod mod (em. : med PD) de lta na yang me la sbyis srog la sogs pa'i ngag la ci 'ongs / 'on te de yang rig byed yin pa'i phyir bden pa nyid dang rjes su 'gro ba yin zhe na / ma yin te nges pa med pa'i phyir ro* //Y 10a8f. [= あるいはまた、たとえ「一年には十二の月がある」というこの(文章)に真実性との肯定的随伴性が存在するとしても、そうであっても、アグニ・ホートラ等の文章において、どうして(真実性との肯定的随伴性が)承認されるだろうか。もしも、それもまたヴェーダなのだ

れ(=アグニ・ホートラ等の文章)が人間によって作られたものであることも(想定される)。誰か(人間)によって作られた可能性があるから¹¹²。」(13)

時には非人為の中に、何びとかにによってそれ(=アグニ・ホートラ等)が(人為的なものを)介在せられる(*pātita*)ということはある得る¹¹³。また、ある別の(ヴェーダの)学派では、作られたものであることが伝承されている。

(反論:) 上述のそういった(=作られたというような)ことが問題になるのは、想起に関してである¹¹⁴。

(回答:) そうではない。信憑性がないからである¹¹⁵。他のものに関しても当て嵌まることになってしまうからである¹¹⁶。しかしながら、こうしたことは全て、以前に既に説明されているので¹¹⁷、ここでは詳しく述べない。というわけで、先を続けよう¹¹⁸。

(to be continued)

から真実性と肯定的随伴性がある、というならば、否。確証されてはいないからである。]

¹¹² Cf. *skyes bus ma byas pa nyid las rig byed yin no zhe na / 'ga' zhig gis ni zhes bya bu ste rig byed nyid du mngon par 'dod pa'i ngag 'di skyes bus byas pa nyid du 'ang dogs te / rig byed mu yin pa 'ba' zhig tu ni ma zad do / ci'i phyir zhe na / skyes bu 'ga' zhig gis byas par stid pa'i phyir ro // Y 10b1f. [= 非人為性であることに基づいて、ヴェーダなのである、といえ、*「誰かによって」と*。ヴェーダであると認められているその文章が、人間によって作られたものであることも想定される。ヴェーダならざるものだけに留まらない。なぜかといえ、誰か人間によって作られた可能性があるからである。]*

¹¹³ Cf. *gal te rig byed byas pa yin na ci ltar skyes bus ma byas pa yin zhe na / 'di ni zhes bya bu ste me la sbyin sreg la sogs pa'i dag go // dogs pa 'di sa bon med pa yang ma yin no zhes brjod pa ni 'ga' zhig tu zhes bya bu'o // Y 10b2f. [= もしも、ヴェーダが作られたものであるならば、どうして非人為であるのか、といえ、*「それが」*すなわち、アグニ・ホートラ等が、である。この疑念はあながち根拠のないもの(**abijaka*)でもない、と言うのが、*「時には」*である。]*

¹¹⁴ Cf. *de lta bu'i zhes bya ba ni byas pa'i'o // Y 10b3. [= 「そのような」とは、作られた、ということである。]*

¹¹⁵ Cf. *yid ches pa med pa'i phyir ro zhes bya ba ni tshad ma med pa'i phyir na dran na de lta bu'i tha snyad yin no zhes yid ches par ni nus so zhes bya ba'i don to // Y 10b3f. [= 「信憑性がないから」、すなわち認識根拠が存在しないから、*「そういったことが問題になるのは想起に関してである」*ということを感じることはできない、という意味である。]*

¹¹⁶ Cf. *gzhan la (P : las D) yang zhes bya ba ni gzhon nu 'byung bu can la sogs par yang de lta bu'i tha snyad de ni dran na yin no zhes bya bu 'dir thal bar 'gyur ba'i phyir ro / Y 10b4f. [= 「他のものに関しても」とは、*「クマールラの誕生」*等に関しても、*「そういったことが問題になるのは想起に関してである」*ということが当て嵌まることになってしまふからである。] なお、人為性・非人為性の問題に関連して、有名なカーリダーサの叙事詩 Kumārasambhava を引き合いに出すことは、ダルマキールティも行っている (cf. PVSV 120,18)。*

¹¹⁷ Cf. *bstan zin pa ni zhal 'grel 'e'u dang pa la sogs par ro // de bas na tshul gsum pa'i rtags nyid rang gis (D : gi P) mthong ba'i sgrar 'dod pa yin gyi / tjes su dpag par bya ba la sogs pa ni ma yin te / gsal bar byed pa med pa'i phyir ro // Y 10b5f. [= 「以前に既に説明されている」というのは、原論註釈(**mukhavṛtti*?) (=Pramānavārtika) の第1章等においてである。以上から、三条件を備えた論証因のみが、*「自身によって認識された」*という語において意図されているのであり、推理対象等は(意図されてい)ない。なぜなら(後者は)説明する手段ではないからである。]*

¹¹⁸ *āstām* は、*āstāpi tāvad etat* の省略的表現。「以上の問題には差し当たり触れないでおこう」との意。

* 本稿執筆にあたり、稲見正浩、林慶仁、野武美弥子、宇野智行、渡辺俊和、小林久泰、岡田憲尚、酒井真道の各氏から、数多くの有益なご教示を頂きました。ここに記して謝意を表します。

本稿は、平成14年度科学研究費補助金基盤A「中世インドの学際的研究」、および平成14年度筑波大学内プロジェクト奨励研究「ブラジュニャーカラグプタの論理学思想の研究」による研究成果の一部である。

補註

このブラジュニヤーカーラグプタの音明に関連して註釈者ジャヤンタとヤマーリは、PVA「認識根拠の証明」章の冒頭および「直接知覚」章冒頭部分に対する註釈に引き続き、今一度ここでダルマキールティの『ブラマナー・ヴァールツェティカ』の章の順序の問題を論じている。参考までに2人の叙述の子ベツト訳原文のみ掲げておく。和訳については、筆者には未だ不明瞭な部分が残っているため、別稿を期すこととした。

Cf. *mngon sum gyi* (P : *gyis* D) *de ma thag tu gzhan gyi don gyis khyad par du byas pa'i rjes su dpag pa ma yin gyi / khyad par du ma byas pa'i tshig dang rjes su dpag pa yang gzhan don du 'gyur ro // 'brel pa'i yul rlog par byed pa nyid kyi phyir mngon sum du yang 'gyur ro // mngon sum la tshig gis ci zhig bya zhe na / rjes su dpag pa la yang mtshungs so // gzhan la rjes su dpag pa med pa bzhin du mngon sum med pa yang ngo // rang nyid kyiis tshul gsum pas rtogs nas rtogs par byed pa yin pa'i phyir rjes su dpag pa nyid yin na / mngon sum las rtogs nas rtogs par byed pa yin (P : 'di D) na yang de nyid yin te / de las kyang rtogs bzhin pa ni tshig gi rtags kyi mam par rtogs pa las rtogs par 'gyur ba'i phyir rtogs par byed pa po'i rang gi don dang (P : dang lacks D) gzhan gyi don yin na / mngon sum yang 'gyur ro snyam du seims pa la rang gi don gyi rjes su dpag pa'i zhes bya ba smos te / mngon sum gyis kyang rtogs nas 'di 'di la smta bar bya'o zhes bya bas brtags pa'i yul nyid brjod par byed pa yin te / rang gi don gyi rjes su dpag pa'i de ma thag tu mal 'byor pa ma yin pa'i yang gnas skabs snga ma la yod do zhes bya ba'i don do // 'di'i bar na mngon sum rang gi don yod kyang nam par dbye ba'i ched du so sor bstan pa yin no // de ltar na ni smra bu po gnyis kyiis bye brag med do zhes bya ba'i rgo! ba sel ba yin no // yang na tshad ma dang cig shos kyi mam par dpyad pa ni rjes su dpag pas yin pa'i phyir de nyid dang par mam par bkod nus gnyis pas / de nyid tshad ma mi.slu.can // zhes bya bas spyis kyang nam par phyé nas mngon sum gyis mtshon te de'i 'og tu de gnyis gas nges par rtogs pa gzhan la brjod pa ste / smra bu po'i gzhan don dang nyan pa po'i rjes su dpag pa yang yin te / 'brel pa rtogs pas rtags yin pa'i phyir ro // yang na rjes su dpag pas spyir mam par bzhug nas bsgoms pas ni khyad par mngon sum yin la / snying rjes gzhan la de ltar ston pa ni rtags med na rtogs par byed pa mi nus pa de'i phyir tshul gsum pa'i rtags brjod pa ni te / dang par mam par gzhab pa'i rang gi don gyi rjes su dpag pa'i de ma thag pa nyid yin par 'di kho nar yin te / gzhan gyi don ni rang gi don sngon du 'gro ba can yin pa'i phyir ro // 260b5ff.*

mam dag rigs pa blu med sna tshogs pa // rang don gnas skabs gnod med bshad nas ni // de yi gzhan gyi don byed gnas skabs mehog // skye po kun las phul byung brjod par bya // bcom ldan 'das kyi gnas skabs ni mam pa bzhi ste // 'di ltar rgyu'i gnas skabs bsam pa dang sbyor ba'i dbye bas gnyis dang / 'bras bu'i gnas skabs kyang rang dang gzhan gyi don phun sum tshogs pa'i dbye bas mam pa gnyis yin pa'i phyir ro // de ston par byed pa'i te 'u yang nam pa bzhi kho na'o // de la slob dpon gyis brtsums pa'i 'jug pa 'di las te'u gnyis kyi rgyan mdzad nas // le'u tha ma'i rgyan lu de kho na ltar bya ba'i phyir brjod pa ni rang gi don gyi zhes bya ba la sogs pa'o // 'on te grangs can bzhin dang rang gi don gyi rjes su dpag pa med bzhin du gzhan gyi rjes su dpag pa (D : med bzhin du gzhan gyi rjes su dpag pa lacks P) brjod dam snyam du dogs (D : dogs P) pa bsu nas brjod pa / rang gi don gyi rjes su dpag pa shin tu nges par byas pa'i tshul gsum pa'i rtags te / de'i (P : de D) rgyu yin pa'i phyir / de las skyes pa lkog tu gyur pa'i shes pa de'i de ma thag tu'o / de med par ni tshul gsum pa'i rtags brjod pa'i bdag nyid gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa mi brjod do zhes bya ba'i don to // 'di ga las zhe (P : she D) na / rang gi don gyi rjes su dpag pa sngon du 'gro ba can yin pa'i phyir ro zhes smos so // de sngon du 'gro ba can ma yin na ni gzhan gyi don gyi (D : don gyi lacks P) rjes su dpag par mi rigs pa'i phyir ro zhes bya ba'i don to // des na grangs can gyis brtags pa'i tshul gsum pa chad pa na gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa ma yin no zhes brjod par 'gyur ro // 'dir ni 'di ltar bsams pa yin te / ci ltar rjes su dpag pa gnang de'i rgyu'i 'bras bu tshig la rjes su dpag par brjod pa de ltar / de mngon sum dang de'i rgyu'i 'bras bu ni ma yin te des na mngon sum du ni mi brjod do // tshig ni rjes su dpag pa'i rgyu yin pas kyang gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa yin gyi / gzhan gyi don gyi mngon sum ni ma yin te / de'i rgyu ma yin pa'i phyir ro zhes de ma thag du ston par 'gyur ro // mam rlog ming gi rten yin pa dang 'bras bu yang yin no zhes bya ba'i tshul gyis so // des na 'di ni ri dags brgyugs pa'o zhes bya ba'i tshig gzhan gyi don gyi mngon sum du ci ltar brjod de (P : de lacks D) // gal te yang 'dir 'di'i go rims brjod par bzhed pa yin nu de'i tshé 'di skad ces rang gi don gyi rjes su dpag pa brjod nas / gzhan gyi don gyi (D : gyis P) rjes dpag brjod de zhes gsung par 'gyur te // spyi'i mtshan nyid brjod nas khyad par gyi mtshan nyid bshad pa zhes bya ba bzhin no // go rims brjod na ni gtan tshigs 'god par yang mi rigs te snga ma nyid bzhin no // 'on te der ni rtogs par sla ba'i phyir ma bkod do zhes na / 'o na 'dir yang de bzhin du 'gyur bas gtan tshigs dgod pas ci bya / go rims ni thams cad dang (D : dang lacks P) mi 'gal bar bstan zin pa kho na te / des na skabs dang rjes su mthun par (D : pa P) bshad pa snga ma nyid legs pa yin no // mngon par 'dod pa'i go rims brjod pa'i don la tshad ma grub pa'i slad (P : klad D) du bshad zin to // Y 2a5ff.

なお、『ブラマナー・ヴァールツェティカ』の章の順序に関する仏教論理学派における議論の様相については、次の拙論を参照されたい。Cf. MOTOI ONO: A Reconsideration of the Controversy about the Order of the Chapters of the *Pramānavārttika* - the Argument by Indian Commentators of Dharmakīrti, *Proceedings of the 7th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Graz 1995, Tibetan Studies, Vol. II*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 1997: 701-716.

略号と文献

1) 一般的略号

- cf. 参照せよ。
 cit. 以下に掲げたテキストの引用。
 em. : コロンの後に掲げられた箇所に対するテキストの改良。
 D デルゲ版。
 Ms PVA 写本 B : *The Sanskrit Commentaries on the Pramāṇavārttikam from the Rāhula Sāṅkṛtyāyana's Collection of Negatives I. Sanskrit Manuscripts of Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikabhāṣyam. Facsimile Edition.* Ed. SHIGEMAKI WATANABE. Patna/Narita 1998 所収。
 n.c. no correspondence=対応なし。
 P 北京版。
 S PVA 校訂本の本文中に示された、Sāṅkṛtyāyana による写本 A の読み。PVA をみよ。
 Sb PVA 校訂本の脚註に示された、Sāṅkṛtyāyana による写本 B の読み。PVA をみよ。
 Se R. Sāṅkṛtyāyana が PVA 校訂本中ないしは脚註に示した改良提案。PVA をみよ。
 : チベット訳ないしサンスクリット原典の註記中に用いられ、コロンの前に掲げられた読みが、コロンの後に掲げられた読みよりも勝っていることを示す。
 {} 写本において消去されている akṣara を意味する。

2) 一次文献

- J Pramāṇavārttikālaṅkāraṅkārikā [Tibetan] (Jayanta) : P 5720, Vol.133, Tshad ma, De 1b1-434a8; Ne 1b1-375a8. 特記しない場合は、Ne 巻を意味する。
 J(D) Pramāṇavārttikālaṅkāraṅkārikā [Tibetan] (Jayanta) : D 4222, Vol.7-8, Tshad ma, De 1b1-365a7; Ne 1b1-312a7. 特記しない場合は、Ne 巻を意味する。
 T Pramāṇavārttikālaṅkāra [Tibetan] (Prajñākaragupta) : P 5719, Vol.132, Tshad ma, Te 1b1-382a7; The 1b1-344a6.
 T(D) Pramāṇavārttikālaṅkāra [Tibetan] (Prajñākaragupta) : D 4221, Vol.5-6, Tshad ma, Te 1b1-308a7; The 1b1-282a7.
 TBh Tarkabhāṣā (Mokṣākaragupta) : *Tarkabhāṣā and Vādashāna of Mokṣākaragupta and Jitūripāda.* Ed. H. R. RANGASWAMI IYENGAR. Mysore 1952.
 TS Tattvasaṅgraha (Śāntarakṣita) : *Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita. With the Commentary of Kamalaśīla.* Ed. E. KRISHNAMACHARYA. Baroda 1926.
 TSP TS をみよ。
 NK Nyāyakandali (Śrīdhara) : *The Prasastapāda Bhāṣhya [Padārthadharmaṣaṅgraha] with Commentary Nyāyakandali of Śrīdhara.* Ed. VINDHYESVARI PRASAD DIVVEDIN. Delhi 1984.
 NM Nyāyamañjarī (Jayanta Bhaṭṭa) : *The Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa.* Ed. SŪRYA NĀRĀYANA ŚUKLA. Benares City 1936.
 NBhūṣ Nyāyabhūṣaṇa (Bhāsarvajña) : *Śrīmad-ācārya-Bhāsarvajña-praṇītasya Nyāyasūtrasya svopajñam vyākhyānam Nyāyabhūṣaṇam.* Ed. SVĀMĪ YOGĪNDRĀNANDA. Vārāṇasī 1968.
 NV Nyāyavārttika (Uddyotakara) : *Nyāyadarśanam Bhāṣya-Vārttika-Tātparyatikā-saḥitam.* Vol. 1 Ed. Taranatha Nyayatarkatīrtha, Amarendramohan Tarkatīrtha. Calcutta 1936 (CSS 28). Vol. 2 Ed. AMARENDRAMOHAN TARKATĪRTHA, HEMANTA KUMAR TARKATĪRTHA. Calcutta 1944 (CSS 29).
 Psv[K] Pramāṇāsamuccayavṛtti (Dignāga) : P 5702, Vol.130, Tshad ma, Ce 93b4-177a6.

- PSV[V] Pramāṇasamuccayavṛtti (Dignāga): P 5701, Vol.130, Tshad ma, Ce 13a6-93b7.
- PV I Pramāṇavārttika, chapter I (Dharmakīrti): *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the autocommentary*. Ed. R. GNOLI. Roma 1960.
- PV II, III, IV Pramāṇavārttika, chapter II, III, IV (Dharmakīrti): *Pramāṇavārttikakārikā (Sanskrit and Tibetan)*. Ed. Y. MIYASAKA. *Acta Indologica* 2 (1971/72), 1-206. [ここでの I, II, III 章は宮坂版の III, I, II 章に各々相当]
- PVA Pramāṇavārttikālaṃkāra (Prajñākaragupta): *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārtikāśāhikāraḥ of Prajñākaragupta (Being a commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārttikam)*. *Tibetan Sanskrit Works Series 1*. Ed. RĀHULĀ SĀṆKRṬYĀYANA. Patna 1953.
- PVin II Pramāṇaviniścaya, chapter II (Dharmakīrti): E. STEINKELLNER, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ. Zweites Kapitel: Svārthānumānam. Teil 1, Tibetischer Text und Sanskrittexte*. Wien 1973.
- PVin III Pramāṇaviniścaya, chapter III (Dharmakīrti): P 5710, Vol.130, Tshad ma, Ce 285a7-2329b1.
- PVin III(D) Pramāṇaviniścaya, chapter III (Dharmakīrti): D 4211, Vol.1, Tshad ma, Ce 152b1-230a7.
- PVT Pramāṇavārttikaṭkā [Tibetan] (Śākyabuddhi): P 5718, Vol. 131, Tshad ma, Je 1b1-402a8; Ñe 1b1-348a8.
- PVT(D) Pramāṇavārttikaṭkā [Tibetan] (Śākyabuddhi): D 4220, Vol. 3-4, Tshad ma, Je 1b1-328a7; Ñe 1b1-282a7.
- PVP Pramāṇavārttikapañjikā [Tibetan] (Devendrabuddhi): P 5717, Vol.131, Tshad ma, Che 1b1-390a8.
- PVP(D) Pramāṇavārttikapañjikā [Tibetan] (Devendrabuddhi): D 4217, Vol.2, Tshad ma, Che 1b1-326b4.
- PVV Pramāṇavārttikavṛtti (Manorathanandin): *Pramāṇavārttikavṛtti (Manorathanandin): Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇavārttikam Ācārya-Manorathanandikṛtayaḥ vṛtṭya samvalitam*. Ed. RĀHULĀ SĀṆKRṬYĀYANA. Patna 1938-1940.
- PVSV Pramāṇavārttika(sva)vṛtti (Dharmakīrti): PVI をみよ。
- PVSVT Pramāṇavārttika(sva)vṛttiṭkā (Karmakagomin): *Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇavārttikam (svārthānumānaparicchedaḥ) svopajñāvṛtṭyā Karmakagomi-viracitayā ṭṭṭikayā ca sahitaḥ*. Ed. RĀHULĀ SĀṆKRṬYĀYANA. Allahabad 1943.
- PST(D) Pramāṇasamuccayaṭkā (Jinendrabuddhi): D 4268, Vol.20, Tshad ma, Ye 1b1-314a7.
- Y Pramāṇavārttikālaṃkāraṭkā Suparīśuddhī [Tibetan] (Yamāri): P 5723, Vol.134-136, Tshad ma, Phe 208a7-345a8; Be 1b1-290a7; Me 1b1-436a8; Tse 1b1-321a5. 特記しない場合は、Tse 巻を意味する。
- Y(D) Pramāṇavārttikālaṃkāraṭkā Suparīśuddhī [Tibetan] (Yamāri): D 4226, Vol.10-13, Tshad ma, Phe 174b1-287a7; Be 1b1-261a7; Me 1b1-328a7; Tse 1b1-251a7. 特記しない場合は、Tse 巻を意味する。
- VA Vipācīārthā (Śāntarakṣita): *Vādanyāyaprakaraṇa of Acharya Dharmakīrti with the Commentary Vipācīārthā of Acharya Śāntarakṣita and Sambandhaparīkṣā with the Commentary of Acharya Prabhachandra*. Ed. S. D. SHASTRI. Varanasi 1972.
- VNT Vādanyāyāṭkā (Vinītadeva): P 5737, Vol.13, Tshad ma, Ze 44a7-71a5
- VNT(D) Vādanyāyāṭkā (Vinītadeva): D 4240, Vol.17, Tshad ma, She 151a6-175a3.
- Vyom Vyomavatī (Vyomaśiva): *Prasastapādabhāṣyam of Prasasta Devāchārya with Commentaries (up to Dravya) Sūktī-by Jagadīśa Tarkālaṅkāra, Setu – by Padmanābha Miśra and Vyomavatī by Vyomaśivāchārya. (to the end)*. Ed. M. M. GOPĪNATH KAVIRĀJ and PANDITRAJ DILINDHIRĀJ SHĀSTRĪ. Varanasi 1983.
- SVT Siddhiviniścayaṭkā (Anantavīryācārya): *Śrīmad-Bhāṭṭakalaṅkādeva-praṇītasya savṛtti-Siddhiviniścayasya Ravibhadrapādopajñī-Anantavīryācārya-viracitā Siddhiviniścayaṭkā*. Ed. MAHENDRA KUMAR JAIN [2Vols.] Benares 1959.
- HB Hetubindu (Dharmakīrti): E. STEINKELLNER, *Dharmakīrti's Hetubinduḥ. Teil 1, Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text*. Wien 1967.
- HB[A] Hetubinduṭkā (Arcaṭa): *Hetubinduṭkā of Bhaṭṭa Arcaṭa with the Sub-Commentary entitled Āloka of Durveka Miśra*. Ed. SUKHLALJI SANGHAVI, MUNI SHRI JINAVIJAYAJI. Baroda 1949.
- HB[V](P) Hetubinduṭkā (Vinītadeva): P 5733, Vol.137, Tshad ma, She 123b8-223b6.
- HB[V](D) Hetubinduṭkā (Vinītadeva): D 4234, Vol.16, Tshad ma, We 100b3-181a7.

A Study of the Parāthānumāna chapter of the Pramāṇavārttikālaṅkāra
– A critical edition of the Sanskrit text and an annotated Japanese translation – (1)

Motoi ONO

This paper deals with the beginning part of the Parāthānumāna chapter of the Pramāṇavārttikālaṅkāra by Prajñākaragupta (467,4-469,22 of Sāṅkṛtyāyana's edition). The analysis of the text is as follows:
[page, line]

0. The inference-for-others is explained just after the inference-for-oneself. [1,3-4]
1. Dignāga's definition of the inference-for-others: "The inference-for-others is, however, a means of elucidating a self-understood fact (*svadṛṣṭārtha*) (to others)". [1,5]
11. The word "self" does not mean the proponent, but anyone who elucidates to others the fact that he has understood himself. [1,6-8]
12. The word "a self-understood fact" means the triply characterized reason (*trirūpalīṅga*). [1,9]
121. Objection: The word "a self-understood fact" can mean any kind of fact. It follows that the inference-for-others elucidates the *inferendum* (*anumeya*). [1,10-12]
1211. Answer: There is no means of elucidating the *inferendum*. If the *inferendum* were understood by means of valid cognition, there would be no dispute. The *inferendum* cannot be understood before elucidating the triply characterized reason. Thus, speech is also an inference, because the inference comes from speech. [1,13-2,2]
12111. Objection: If speech is the inference-for-others because the latter comes from the former, it follows that speech is also the perception-for-others because the latter comes from the former. [2,3-4]
121111. Answer: Perception cannot come from speech. [2,5-10]
1211111. Objection: Perception in others comes from the order "look, a deer runs" etc. [2,11]
12111111. Answer: Not a perception, but an inference occurs just after the order. Others who get an order take action after they have inferred from the order that they necessarily could look at the fact if they turn their face to the fact. Therefore, speech of an order is the cause of an inference. [2,12-17]
121111111. Objection: In this case, the logical reason is the essential property. The effect as reason, however, does not come from speech. Therefore, the explanation in the Pramāṇasamuccayavṛtti that "the statement of the triply characterized reason is an inference-for-others" is contradictory. [3,1-6]
1211111111. Answer 1: Speech is always meaningless about the fact that is recognized by perception. Just as "for wise men what is to be stated is a logical reason alone", an inevitable connection alone is what is to be stated in this case. [3,7-11]
1211111112. Answer 2: The speech "this is smoke" is necessary for denying that the smoke that others perceive is erroneous. Others infer from this speech that their perception is not erroneous. Therefore, speech is the cause of an inference. [3,12-4,2]
121111112. Objection: Then, the speech "here is smoke" is the inference of the essential property, but not the inference of the cause, because speech infers the essential property. [4,3-4]
1211111121. Answer: In the case of the inference-for-oneself, the essential property as reason about the colour and shape of smoke intervenes in the inference from the effect as reason. In this case too, erroneous cognition cannot be excluded without the essential property as reason. [4,5-7]
12111111211. Objection: It does not mean that there is no effect as reason in the inference-for-oneself.

- In the inference-for-others, on the other hand, there cannot be the effect as reason. [4,8-13]
12111112111. Answer 1: It depends on cases. The character of the inference-for-others as inference is stated concerning the essential property as reason, not concerning the effect as reason. [4,14-16]
12111112112. Answer 2: If there is no erroneous cognition, the essential property as reason does not intervene in the inference from the effect as reason concerning the inference-for-oneself, and the inference comes directly from speech concerning the inference-for-others. [4,17-18]
12111112121. Objection: If there is no erroneous perception, what is the purpose of speech? [4,19]
121111121211. Answer: In order to indicate the inevitable connection. [4,20-5,1]
- a. Speech cannot have the validity of cognition (*pramāṇatva*) without having the character as inference produced by being the cause of an inference. [5,2-4]
- a1. Objection: Why do only perception and inference have the validity of cognition? Speech also has the validity of cognition because it is the cause of our activity. [5,5-6]
- a11. Answer: People can act only by means of remembrance even without perception etc. But remembrance is really not valid cognition. Therefore, one cannot recognize that speech is valid cognition because of motivating our activity. Speech is valid cognition, inasmuch as it is the cause of an inference. Speech has the character as inference, but is not valid by itself. [5,7-15]
- a111. Objection: Why does the statement of the Veda have the validity of cognition, then? [5,16]
- a1111. Answer: Concerning the statement that "there are twelve months in a year" etc. the Veda has the validity of cognition because it elucidates objects of perception and inference. Concerning extrasensory objects, the Veda does not have the validity of cognition. [5,17-18]
- a11111. Objection: The Veda has the validity of cognition concerning extrasensory objects because of its character of not coming from men. [5,19]
- a111111. Answer: nobody relies on speech solely. Why does everyone not understand extrasensory objects, if the Veda is valid like perception? [6,1-6,2]
- a1111111. Objection: In the case of the proof of momentariness etc. also, not everybody understands objects. If you suppose that it is because of erroneous cognition, there is erroneous cognition in the Veda, too. [6,3]
- a11111111. Answer 1: In the case of the inference, the erroneous cognition can be excluded by the inference concerning the same kind of objects. In the case of the Veda, it cannot be excluded by the statement concerning the same kind of objects. The inference has the validity of cognition, inasmuch as it has the positive concomitance. The Veda has no positive concomitance, however. [6,4-7]
- a11111112. Answer 2: Only speech is an inference-for-others, inasmuch as it states the triply characterized reason, but not the statement of the Veda. The Veda does not have three characters. It has neither positive concomitance nor the fact that (the reason) qualifies the subject (*pakṣadharmatva*). [6,8-10]
- a111111121. Objection: The statement that "there are twelve months in a year" etc. is the positive concomitance. [6,11]
- a1111111211. Answer: It is not certain that the statement of Agnihotra etc. is the Veda. It is supposed that the statement comes from men. [6,12-16]
- a11111112111. Objection: Concerning remembrance, the character of being produced comes into question. [6,17]
- a111111121111. Answer: This argument is true of other cases, too. [6,18-19]